

地域の教育力

——地域の精神的伝統とモラロジ—の開発活動——

細川 幹夫

目次

はじめに

一、仮説の構成

二、地域の教育力としての精神的伝統—高知県の場合—

(一) 衆議院議員選挙にみる保守・革新勢力の推移

(二) 政党支持に関する世論調査

(三) 郡市別の政党得票比率

三、高知県のモラロジ—開発史からえた留意点

(一) モラロジ—の普及しやすい地域と普及しにくい地

域の特性

(二) 配流などで土佐に來た貴人・偉人と地域の精神的

伝統

四、地域の精神的伝統とモラロジ—の開発—山形県の場合—

(一) 出羽三山信仰と庄内周辺

(二) 蔵王連峰信仰と山形市周辺

(三) 上山市における「ふるさと創生」と地域の教育力

むすび

はじめに

最近、わが国では「地域の教育力」という問題がとりざたされるようになってきた。それはわが国の高度産業化と都市化に基づく人口の社会移動によって地域の連帯感が弱体化し、その結果として青少年の犯罪や非行が多くなり、校内暴力や家庭内暴力というような新しい社会問題も加わるようになってきたからである。ここにきて

ようやく地域社会の再建とその教育力をもう一度新しい形で回復しようとする動きが出てくるようになった。この動きを示すものが「地域の教育力」という問題である。

この「地域の教育力」については質的（価値内容的）にも量的にも検討を要する。また、その質（価値）が地域住民の意識の中にあるか、潜在意識の中にあるかも検討する必要がある。とくに筆者が関係しているモラロジの開発活動に関しては、まず地域の教育力の一般的な質（集合表象としての価値）、および個々人の意識や潜在意識の中にある質（個人表象としての価値）に注目する必要がある。なぜならば、モラロジの価値観が比較的容易に理解され受容される地域があるかと思えば、何十年かけても定着しない地域もあるからである。地域に定着しない場合には、地域の教育力の根底に異質の価値観があり、個々の地域住民の意識や潜在意識の中に異質の価値観が存在することが多い。

本稿では、地域の教育力の内実であるその精神的伝統をモラロジの価値観との異同という観点からとらえ、モラロジの開発活動に対する一つの視点を提供したいと思う。ここに提示するものは、高知県の石元貢氏（モラロジ研究所理事）の長年の開発経験に示唆をうけ、それに筆者の乏しい開発経験を加えた一つの仮説であり問題提起である。

一、仮説の構成

道徳科学（モラロジ）研究所の第二世代所長であり、麗沢大学の初代学長であった広池千英先生はかねがね「モラロジの開発で地方に出かけるときには、その土地の歴史をよく調べて行きなさい」と言われていた。筆者はこの教訓をこれまで当然のことだと受け止めながらも、まったく表面的にしか受け止めていなかった。最近、こ

の教訓は地域の教育力の質・量、および個々の地域住民の意識や潜在意識の内面をも示唆したものであるという感を深くしている。

筆者は郷里の高知県でモラロジの開発が比較的容易な地域と困難な地域があることに漠然と気づいていた。その開発の難易が地域の教育力の質量に関係していることに気づいたのは、ここ十数年、東北地方の歴史や文化を調査研究しながら、モラロジの開発（人心の開発のこと。以下「開発」と略称する）に出かけるようになったからである。とくにモラロジ研究所福島社会教育センターに出講していて、そこで東北地方の歴史や文化に深く根ざしている精神的伝統（伝統的な精神の系譜）に気づきはじめ、今さらのごとく広池千英先生の示された貴重な教訓を噛みしめているところである。

筆者のような西南日本人は、一般に東北日本人の中に根づいている精神的伝統をどれだけ研究し、それを理解しているのであろうか。

まず最初の問題提起は、われわれは漠然と日本人は同一民族であるという前提に立って、東北人も同じ大和民族だと考えているのではないかということである。そもそも平安時代から江戸時代まで続いた「征夷大將軍」の官位が何を意味してきたかをよく考えてみる必要がある。

仙台に本社をもつ河北新報社の釜范正幸記者の説明によれば、「《河北新報》の設立趣旨は、東北人を大和民族の支配からいかに解放し独立させるかにある」という⁽¹⁾。この率直な告白は筆者に大きな衝撃を与えた。そう言われてみれば、法医学の権威古畑種基氏の『血液型の話』（岩波書店、一九六七年）の研究が思い浮かぶ。その研究によれば、日本人の血液型は西南日本人と東北日本人との間で明らかに差異があるようだ。ただこの研究から直ちに東北人が異民族だというわけではない。

筆者が調査研究の場所として選んだ山形県の県民意識はどうであろうか。菅田慶恩・横山昭男共著『山形県の歴史』によれば、山形県民は「いつも外来者によって支配され、農民たちはただ黙々としてはたらいてきた。従順のようだが、心服してきたのではない」というように、屈折した東北人の心情が吐露されている。

このような東北人の心底にいまだに潜む一種の独立意識に西南日本人はまだほとんど気づいていないようだ。この解放・独立にこだわる人々にとっては、モラロジの国家伝統の原理はあるいは受容しがたい問題であるかもしれない。

第二の問題提起は、同じ大和民族と思われる人々の間でも、会津若松などには薩摩や長州に対する怨念が今でもかなり残っているということである。東北地方には戊申戦争で会津を追われた人々の子孫がいて、その子孫だと告白されるときがある。また、かつての仇敵が作った明治以来の政治体制に反感をもつ人もいる。また、薩長土肥の子孫には娘を絶対に嫁がせないという怨念もいまだに残っている。

第三の問題提起は、東北地方にも地域差があつて、西南日本人にも開かれた精神的伝統の存在するところもあるということである。たとえば、山形県の上山市には西南日本人にも開かれた精神的伝統がある。つまり上山城の代々の城主には能見松平氏や土岐氏などがなつて善政を行ひ、またこの地には紫衣事件で徳川幕府によって配流された沢庵和尚（但馬国出石出身）が大きな足跡を残したこともあつて、戦後その遺徳を偲んで上山城や春雨庵が再建され、往時の模様を伝えている。すなわち、上山城の内部は博物館となつて色々な宝物、資料、記録が保存・展示され、またこの城には水が出なかつたために沢庵が近くの山裾から水道を引き池と庭を作つたという工事跡も保存されている。さらに、沢庵がいた春雨庵には茶室も作られ、訪ねて来る人々に茶の湯をふるまつて沢庵の遺徳を今に伝えている。

また、山形県人は非常に信仰心が厚く、各地に神社や仏閣が散在し、どの場所にも参拝者が多い。なかでも出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）への信仰は根強いものがある。山岳信仰のメッカ出羽三山は、第三二代崇峻天皇の第一皇子蜂子皇子によって開山され、しかも稲作が庄内平野に伝えられたと言われている。その稲作に必要な水は出羽三山からの雪溶け水によるので、蜂子皇子への信仰は根強い。この地域ではモラロジの国家伝統の原理も受け入れられやすく、共感する人々も少なくない。鶴岡市には、すでにモラロジの事務所が設置されている。

これらの地域のことについては、後でもう少し詳しく述べる予定である。

以上に述べたことを要約すれば、モラロジの開発には地域の教育力の質、とくに地域の精神的伝統をよく研究し理解しておく必要があるということである。地域の精神的伝統を無視した「開発」は成功しないことが多い。この仮説は国内に当てはまるばかりではない。それは「あとがき」でも取り上げるように外国でもあてはまる普遍的な問題であろう。

以下に高知県と山形県で実際に調査した「地域の教育力」としての精神的伝統をモラロジの開発活動との関連性においてとらえてみたい。

二、地域の教育力としての精神的伝統——高知県の場合——

高知県の精神的風土については、すでにモラロジ研究所編『日本の近代化と精神的伝統』（広池出版、昭和六〇年）の中の「坂本龍馬」の項で明らかにしたように、古来から遠流・左遷の国に生きてきた土佐人の血の中には反権力・革新の反骨精神が宿っている。しかし、一方では明治以来の近代日本の建設者の系譜を継ぐものであ

地域の教育力

第1表 高知県選出衆議院議員選挙における各党の得票率の推移

党名	昭和年月									
	21/4	22/4	24/1	27/10	28/4	30/2	33/5	35/11	38/11	
自由	24.43	44.34	36.76	59.73	69.47	42.60	52.10	63.01	60.89	
民主・進歩	24.96	13.79	18.80	0	0	17.85	—	—	—	
改進黨・新自	—	—	—	12.04	10.55	—	—	—	—	
社会	19.84	19.23	12.24	5.73	16.49	23.56	31.21	22.63	25.80	
民社	—	—	—	—	—	—	—	12.04	3.76	
共産	4.59	2.61	6.07	0	2.32	0	1.05	2.32	9.55	
公明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
無所属	6.02	12.03	15.88	7.71	0	15.99	0	0	0	
その他	20.16	8.00	10.26	14.79	1.17	0	0	0	0	
合計	100.00	100.00	100.01	100.00	100.00	100.00	?	100.00	100.00	
得票総数	589,305	334,014	355,604	384,542	369,973	376,646	427,908	412,159	402,704	
当選議員 政党内訳	保守3	4	4	5	4	3	4	4	4	
	革新2	1	1	0	1	2	1	1	1	

党名	昭和年月								
	42/1	44/12	47/12	51/12	54/10	55/6	58/12	61/7	
自由民主	51.02	51.57	49.03	44.87	46.59	48.86	47.57	49.58	
新自由ク	—	—	—	5.56	2.91	4.79	2.32	0	
社会	26.90	20.36	17.90	14.57	18.43	16.12	15.52	16.31	
民社	0	1.83	0	0	0	0	0	0	
共産	8.71	12.42	18.69	15.52	15.69	15.63	16.26	16.33	
公明	13.37	13.82	14.25	19.49	16.38	14.60	18.32	17.78	
無所属	0	0	0	0	0	0	0	0	
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	100.18	100.00	99.87	100.01	100.00	100.00	99.99	100.00	
得票総数	441,428	452,094	466,886	467,266	454,423	427,310	444,730	434,437	
当選議員 政党内訳	保守2	3	3	2	2	2	2	2	
	革新3	2	2	3	3	3	3	3	

(注) 一はその政党がないこと、0はその政党の立候補者がいないことを意味する。また、政党の項目の「その他」は「その他の政党」の意味であり、初期の頃はさまざまな政党が乱立していた。自由・民主・進歩・改進黨・新自由クラブの各政党は現在合併して自由民主党（通称、自民党）になっている。

るといふ自負心もある。したがって、この両方の精神的伝統が高知県人の胸の中で渦を巻いている。前者の側面が表面に出れば革新的・野党的な反骨精神が溢れてくるし、後者の側面が優勢になれば保守的・与党的な精神にもなり、土佐は「保守王国」となる。そのアンビヴァレント (ambivalent) な性格が選挙の時に現れる。

(一) 衆議院議員選挙にみる保守・革新勢力の推移

このような観点から高知県民の精神的伝統の一般的な特徴をみようとする場合には、まず最初に戦後の国政選挙（衆議院議員選挙）の得票数を調べてみるのも無駄ではなからう。第一表は昭和二十一年以後の選挙において各政党が獲得した得票率（パーセント）を示したものである。この表をみると、昭和二十一年から五一年までは保守政党が過半数以上の得票率を占めて「保守王国」と言われていたが、五四年からは保守党と革新党がほぼ同数の得票を占めるようになり、保守はほぼ均衡状態を保つようになっていく。

高知県選出の衆議院議員定数五名の保守・革新の割り振りはどうなっているであろうか。昭和二十一年に行われた第一回目の総選挙と昭和三〇年の総選挙では、当選者は保守政党議員三名に対し、革新政党二名の割り振りであった。ところが、続いて行われた昭和二十二年、二十四年、二十七年、二十八年、三三年、三五年、三八年の総選挙では、保守政党が圧倒的な強さを示し、二十七年の選挙では五議席すべて保守政党が独占し、その他の年は保守政党議員四名、革新政党議員一名という割り振りで当選者を出した。

このような選挙結果を出したのは、当時高知県選挙区にはわが国の総理大臣（元老）である吉田茂がおり、また自民党幹部の林譲二（大臣、幹事長、衆議院議長歴任）もいたからであり、県民には「おらが国の首相や大臣に恥をかかせるな」という与党的意識があったように思われる。また「戦後の日本再建は再び土佐から」とか、

地域の教育力

第2表 高知新聞の世論調査による政党支持率（パーセント）

政党	昭和年月					
	44/12	47/12	51/12	54/10	55/6	58/12
自民党	49.5	44.2	44.7	45.0	53.6	51.4
新自由タ	—	—	2.2	0.5	0.2	0.8
社会	16.4	15.5	12.9	16.6	14.0	14.3
民社	2.1	1.7	1.5	2.6	2.3	1.5
社民連		—	—	0.1	0.1	0.6
共産	3.0	5.6	5.7	7.3	5.6	5.8
公明	6.4	6.0	6.8	6.5	5.8	7.4
支持政党なし	15.2	20.3	16.1	13.2	13.8	11.8

第3表 市部における保革政党の得票数の比率（革新票／保守票）

市名	昭和年月	得票数の比率							平均
		44/12	47/12	51/12	54/10	55/6	58/12	61/7	
室戸	0.68	不明	0.77	0.79	0.63	0.71	0.62	0.70	
安芸	0.88	"	1.02	0.93	0.87	0.98	1.05	0.95	
南国	1.10	"	1.13	1.25	1.02	1.18	1.16	1.14	
高知	1.23	"	1.30	1.44	1.12	1.31	1.33	1.28	
土佐	0.94	"	1.04	1.12	0.97	1.05	1.11	1.04	
須崎	0.86	"	0.94	0.98	0.78	1.00	1.01	0.92	
中村	1.01	"	0.80	0.95	0.92	1.00	1.01	0.94	
宿毛	0.65	"	0.83	0.68	0.67	0.79	0.84	0.74	
土佐清水	0.60	"	0.81	0.92	0.77	0.98	0.88	0.82	
市部平均	1.01	"	1.10	1.21	0.98	1.13	1.15	1.09	

「われわれが日本再建の中心だ」という気概と誇りもあったように思う。だから吉田首相が世にいう「バカヤロー解散」をした昭和二七年から二八年にかけての頃は、吉田首相にやんやの喝采を送り、その選挙やり直しの要請に県民は保守党全員当選と四名当選という形で応えたのである。この頃の高知県民には、確かに日本を支える与党意識が優勢であったようにみえる。

吉田茂が政界から引退したのは昭和三八年の選挙からであり、林譲二は死亡によって三五年の選挙から姿を消している。

革新政党が当選者数で保守政党を制したのは昭和四二年の選挙においてであり、この時革新政党議員三名、保守政党議員二名となる。その後、この比率は昭和四四年と四七年の選挙で一時逆転するが、五一年以降五四年、五五年、五八年、六一年と五回連続して革新政党議員が三名を占めるようになった。したがって、最近の高知県民の意識構造は保守的・与党的な側面も残しながら、革新的・野党的な側面を表面に出していると言えるであろう。

以上は総選挙において各政党の立候補者が獲得した得票百分率と当選者の政党内訳であるが、高知県民の政党支持意識はどうなっているであろうか。

(二) 政党支持に関する世論調査

第二表は高知新聞が昭和四四年から五八年までの選挙時に行った「政党支持に関する世論調査」の結果である。⁽⁸⁾ この世論調査を見ると、昭和五四年までは保守政党が過半数を割り、五五年から過半数の支持を得ていて、むしろ選挙時の得票数や当選議員の割り振りとは逆の結果を示している。

第4表 郡部の代表的な町での保守政党的得票数の比率

町名	昭和年月							
	44/12	47/12	51/12	54/10	55/6	58/12	61/7	平均
田野	0.76	不明	1.19	1.33	1.10	1.19	1.21	1.12
香我美	0.50	"	0.67	0.69	0.60	0.74	0.80	0.66
土佐山田	0.88	"	0.94	0.92	0.79	0.96	0.95	0.90
野市	0.64	"	0.72	0.78	0.68	0.84	0.93	0.77
本山	1.02	"	1.21	1.26	1.03	1.18	0.99	1.11
土佐	0.63	"	0.62	0.58	0.49	0.59	0.61	0.59
伊野	1.07	"	1.17	1.15	0.98	1.04	1.02	1.07
春野	0.75	"	0.97	0.95	0.75	0.90	0.96	0.88
佐川	0.80	"	0.81	0.85	0.70	0.85	0.79	0.80
窪川	0.92	"	0.86	0.90	0.76	0.99	0.93	0.86
大正	0.79	"	0.80	0.64	0.63	0.69	0.79	0.72
大方	1.08	"	0.93	0.92	0.95	1.19	1.17	1.03
郡部平均	0.87	"	0.82	0.79	0.71	0.82	0.84	0.79

第二表と第一表を比較してみると、自民党と社会党の場合は得票率と世論調査の支持率との間にあまり開きはないが、公明党と共産党の場合にはいずれも得票率が支持率を大きく上回り、共産党の得票率は支持率の三倍前後に達し、公明党の得票率も支持率の二・五倍程度になっていることが注目される。

(三) 郡市別の政党得票比率

つぎに、郡市別にもう少し細かく保守政党(自民)と革新政党(公明・社会・共産)の得票率を計算し、その比率を見てみよう。この比率は保守政党の得票数の合計を「分母」にし、革新政党の得票数を「分子」にして計算したものである。したがって比率が一・〇〇の場合は得票数が保守・革新同数であることを意味し、一・〇〇以下の場合には保守票が多く、一・〇〇以上の場合には革新票が多いことを示している。

まず最初に、昭和四四年以後の市部における保守政党的得票比率を見てみよう。(第三表参照)

これに対して、郡部の代表的な町での保守・革新政党的得票比率を見てみよう。(第四表参照) 第三表と第四表を比較すると、一般的に言われているとおり、市部では革新票が多く、郡部では保守票が多い。

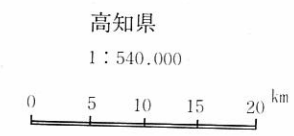
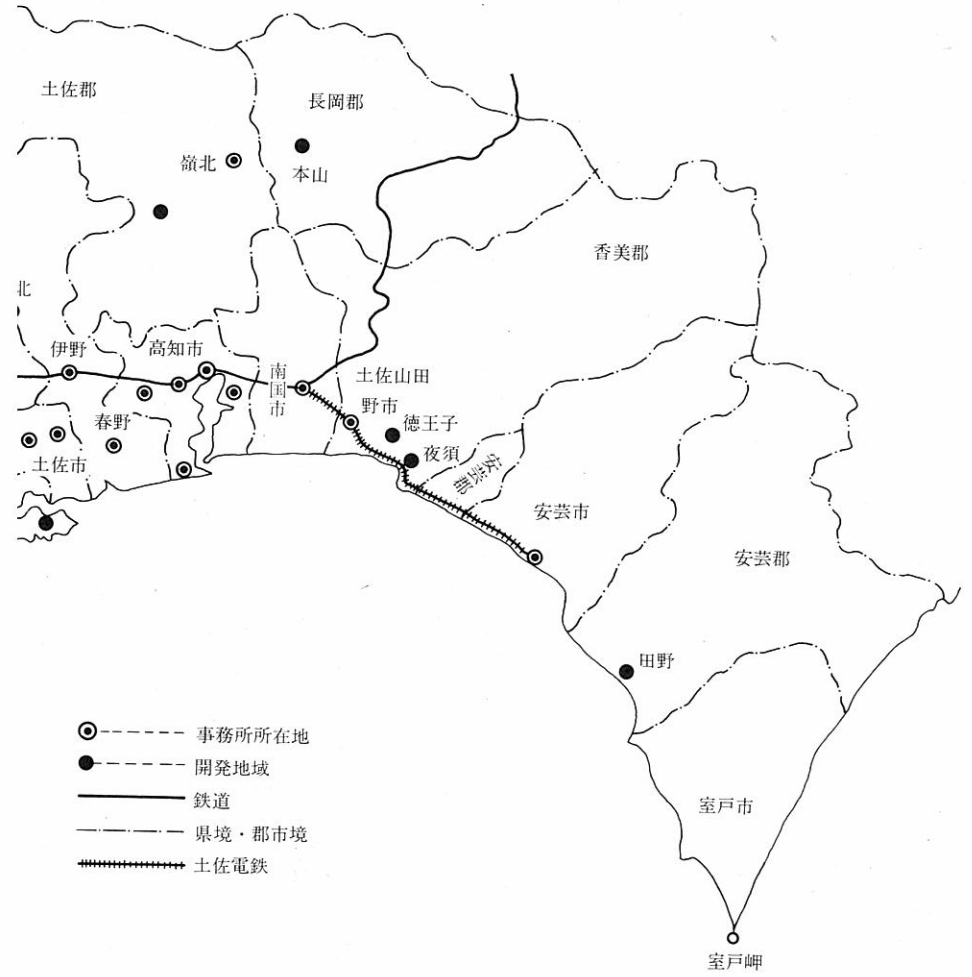
戦後、全国的に町村合併が行われて多くの市が誕生したが、高知県では戦前からの市部は高知市だけであり、現在でも本場に市部といえる都市は高知市のみである。高知県は山岳地帯が国土の大半を占め、平坦地が少なく、大工業が発達しなかつたので、大人数の人口を吸収する都市が発達しなかつた。そのため第三表に示した諸市は、戦後の町村合併政策(三万人以上の住民で構成する)によってかろうじて市に昇格したものばかりである。これらの市が高知市のような都市になることは地勢的条件からみてまず不可能である。現在よりも大きな市になる可能性のあるところは、さしあたり中村市と南国市ぐらいであろうか。それに須崎市が続いている。その他の市では過疎化が進み、住民の流出によって合併時の人口三万人を割っているところ(室戸、安芸、宿毛、土佐清水)もある。これらの市ではいまだに郡部の性格を残している。

それに対して、郡部でも田野町は安芸市に、伊野町は高知市に、大方は中村市に隣接しているために徐々に市部化しつつある。

三、高知県のモラロジー開発史からえた留意点

高知県でモラロジーの開発活動が本格的にはじまったのは昭和一五年頃からである。⁽¹⁰⁾「開発」は土佐市高岡町の出身である石元鉄造氏によってまず先鞭がつけられた。やがて野市町にはじめてモラロジー世話事務所ができ、田中浅次郎氏が最初の世話係(現在の主任)となる。続いて高知市南奉公人町に二番目の世話事務所ができて岡

第1図「開発」地の位置



村静男氏が世話係となり、さらに土佐市高岡町に第三の事務所ができ石元貢氏が世話係となる。その後、「開発」がしだいに全県下に広がるようになって、窪川、嶺北、安芸などにも事務所ができた。現在では、高知県東部支部に嶺北(土佐町)、安芸、野市、土佐山田、後免(南国市)、高知東、高知中央、高知城東、高知南、高知西(いずれも高知市)の一〇事務所ができ、高知県西部支部には春野、伊野、佐川、土佐市、土佐市東、須崎、窪川、宿毛の八事務所がある。

(一) モラロジの普及しやすい地域と普及しにくい地域の特性

これまでの「開発」経験からみると、モラロジが比較的普及しやすい地域と普及しにくい地域とがあるようだ。

モラロジが比較的普及しやすい地域には、つぎのような精神的伝統が存在するようにみえる。まず第一に、都から配流された上皇、天皇、皇子、あるいは公家などが一時居住し、その人々に地域民が影響を受け、その精神的な誇りを今に伝えている地域である。たとえば、香我美町徳王子とその近辺の野市町・夜須町・土佐山田町、土佐市と伊野町、佐川町と越知町、大方町などである。また、安徳天皇を奉じて壇の浦に敗れ、土佐の山中に敗走し定着した平家部落のある地域(たとえば土佐町、越知町・池川町を含む高吾北地域)などである。

第二に、国学が栄えた地域にもモラロジが普及している。たとえば、南学の発祥地である春野町弘岡や、南学を吸江寺で修行中に学んだ山崎闇齋のいた高知市五台山付近である。ここから江戸末期の国士武市半平太(瑞山)も出ている。

第三に、学問の神様菅原道真に縁のある土地、すなわち宿毛市・小筑紫や、道真の子高視のいた高知市潮江の

天満宮周辺である。

これに対して、モラロジが普及しにくい地域としては、モラロジの「伝統の原理」が受容されにくい精神的伝統を残している地域、たとえば中村市のような地域である。ここはもともと一条公の開拓した由緒ある街であって、伝統的文化をもつ点では高知市に優るとも劣らない所であるが、明治の社会主義者幸徳秋水(中江兆民の弟子)を出すような精神的特性もある。したがって、高知県西部支部の人々が二〇数年来「開発」に取り組んでいるが、いまだにモラロジを続けて聞く人がほとんどいない。一時的にモラロジに関心を示す人は出るが、すぐ消えてゆく。

この地でモラロジに関心をもつ人は他所から転勤などで一時的にこの地に来ている人が多い。

この市の西隣の宿毛市からは自由民権主義者の林有造(林讓次の父)や竹内綱(吉田茂の実父)が出ていて、中村市とは異なる精神的伝統がある。ここにはすでにモラロジ事務所ができ、その南隣の小筑紫や大月に「開発」の手が伸びている。

また、中村市の東隣の大方町でも「開発」が進んでいる。この地には第九六代後醍醐天皇の第一皇子尊良親王が配流されていたこともあって、皇室尊重の精神的伝統がいまだに残っている。

このような「開発」事例を検討すると、モラロジの「伝統の原理」が深く係わっているようにみえる。その点をもっと少し立ち入って考察してみよう。

(二) 配流などで土佐に来た貴人・偉人と地域の精神的伝統

すでに述べたように、土佐は三方を海に囲まれ、北方は險阻な四国山脈にはばまれて、他国人との交流が不便

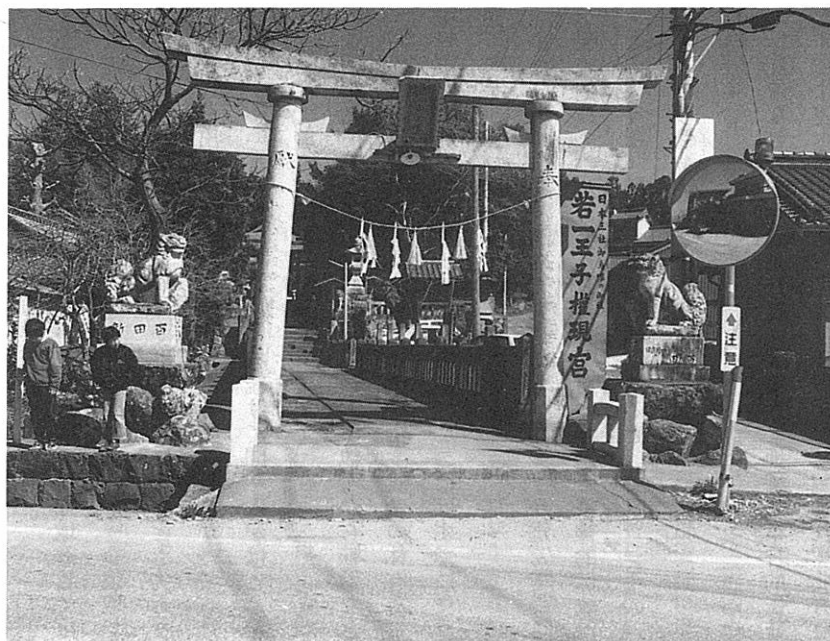


写真1 池田親王を祭る若一王子宮神社

な国であった。それがために、土佐は古来から遠流・左遷の国として、都から重要な貴人・偉人がほぼ五〇人余り流されてきた。

土佐に流された人々の中には、池田親王、安徳天皇（？）、一宮尊良親王、土御門上皇、藤原師長しなが、法然などもある。また、都の醜い政争を嫌って土佐にやってきて、さらに長安に向かった皇子として、第五一代平城天皇の第三皇子高岳親王（真如法親王）もいる。

さらに左遷・西下させられた人々として、菅原道真が太宰権帥たさいのけんすいとして左遷されたときに、その子高視も連座して土佐介に左遷された。その他の著名人として『土佐日記』の著者紀貫之がいる。

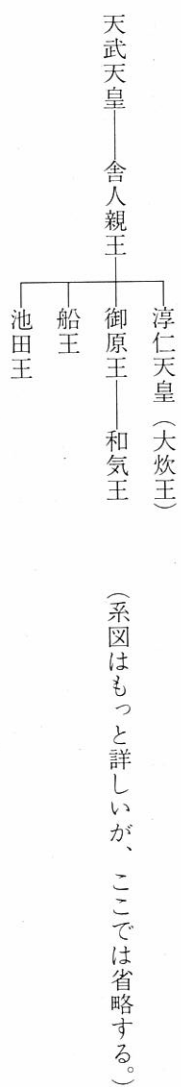
これらの人々がそれぞれ、どのような精神的影響を地域の人々に残したであろうか。

① 池田親王と徳王子

土佐に最初に流された皇子として池田親王がいる。池田親王は「淡路廢帝」として知られる第四七代淳仁天皇の弟宮である。兄天皇が第四六代孝謙天皇（女帝）から天皇の位を譲位されたときに皇太子となり、やがて兄天皇が先帝によって廢位され淡路に配流されたときに土佐に流され、徳王子徳善とくぜんというところにおいて、そこで薨去こうきょされたといわれている。徳王子には若一王子宮神社わがいちのみやがあり、天照皇大神と池田親王が祭られているようだ。

高知県編『高知県史要 全』（大正一三年、昭和四八年復刻版）の第一編・第四節の「配流」の項に池田親王の記事があり、つぎのように書かれている。

淳仁天皇天平宝字八年、天皇淡路に遷されたまふや、皇嗣池田親王は多く馬を集めて異図ありとの廉を以て、諸王に下して土佐に流さる、旨、同年十月壬申の詔にあり。



相伝ふ親王土佐に下国せられ、香美郡王子村（今の徳王子村徳善）に仮居したまふ。村社金峰神社は親王を奉祀すと。

同村に在る若一王子宮の祭神は天照大神、相殿は池田親王なり。¹¹

また、若一王子宮所蔵の「若一王子宮由緒写」によれば、つぎのように書かれている。

一 祭神 天照大神 池田親王

一 相殿 速玉男神 伊邪那美命 事解男神

○土陽淵岳志云、続日本紀天平宝字八年十月壬申、廢帝遷御淡路国。此時池田親王為諸王配土佐国云々ト云ト。或云、王子ハ熊野神ヲ祭ル故ニ云カトアリ。

○土人口碑云、元ト天照皇大神ヲ奉祀ス。池田親王謫セラレ當村ニアリ、薨後當社ニ合祭ス。：

因云、親王當村ニ移サセ玉ヒ、若一王子ノ社頭ニ至リ、一首ノ和歌ヲ詠シ玉フ「神ノ座ス森ノ老木ヲ見テモナホ、ムカシシノブノ草ゾシゲレル」又手親作ラセ玉ヘル翁ノ飯面ヲ社内ニ納メタリシニ、後盜ノ為ニ掠ラル云々。又元德善村ニ属スル地面小字天王或ハ西天王（今字花散里^{ハナナルサト}）ト称スル所ヲ、文化ノ末年国枝某ナル者、此ニ宅地開（東西凡十五間、南北凡十二間）シ時、一壺ヲ得タリ。圍大ナル所二尺五寸許、高サ一尺五寸許、壺外朱ヲ以掩ヒ、又其外ハ墳ムニ木炭ヲ以シ、更ニ其外ヲ掩フニ製瓦ニ用ユベキ土ヲ以テス。壺内ニハ勾玉管玉ヲ充テタリ。壺ヲ蓋フニハ一円鏡ヲ以テセリ。鏡ハ開壺ノ際過テ碎ク。其勾玉ノ類ハコレヲ庭上ニ私設スル金刀毘羅神祠ヘ納メ、其米ハコレヲ屋後ニ瓦製ノ小神祠ヲ設ケ破鏡ト共ニ之ヲヲサメ、若宮ト奉称ス。而シテ玉類ハ或ハ人ニ贈リ、或ハ小児ノ玩具スル所トナリ、悉ク散逸セリ。其壺ハ同郡山南村住石川某ノ家ニ贈ル。今ハ碎テ両片トナリ猶遺存スト云。其宅地ニ末夕墾セザル時ハ団々トシテ半円体ヲ置ケル如キ一小丘ナリシヲ墾シテ之ヲ平ニス。其下底ニ至テハ自然ノ土ナレトモ其上ハ人力ヲ以テ積累セシ赤土アリ、土人或ハ云、親王薨後之ヲ火化シ、勾玉等ヲ併テ此ニ葬レリ、故ニ壺ヲ護スル事如此嚴密ニシテ赤土ヲ積累シテ之ヲ封ジ、円丘ノ如クス乎ト。此言或ハ信ズベシ。（當村字朝兒^{チウガハ}鎮座金峰神社之祭神池田親王）
當村字花散里鎮座和賀玉神社ノ祭可參觀。

また、最近発行された『香我美町史上巻』（昭和六〇年四月、香我美町史編纂委員会）の古代編、第二章第

六節に「池田親王の配流」という項目が取り上げられている。それによれば、戦後の考古学や歴史学からの知見も踏まえて、つぎのように書かれている。

（前略）

さて池田親王は淳仁天皇の弟で皇太子となったが、『続日本紀』卷十九に：

（中略）畿内巡察使に任せられた記録が見えるが、『同紀』天平宝字八年（七六四）十月壬申の条に「廢帝遷御淡路国、此時池田親王為諸王、配土佐国」とある。また『土佐国編年記事略』卷一に「同八年甲辰九月壬申池田親王ヲ諸王トシテ土佐国ニ流ス。此夏馬ヲ多ク集メテ事ヲ謀ルト奏ス者アマタ、ヒナルニ依テ也」と記してある。つまり淳仁天皇が孝謙天皇のために退位させられて淡路に遷御し、いわゆる淡路廢帝となるのであるが、池田親王は多くの馬を集めて謀反を企てたと奏上する者があって、親王の名はそのまま、諸王の身分として土佐に流されるのである。

『香美郡町村誌』徳王子村には「古老伝テ親王此地ニ住セ玉フニ因テ村ノ名ヲ王子ト云」と記されているが、王子の村名については若一王子宮が鎮座するが故に名付けたともされている。：（中略）：

記紀の上では、池田親王が土佐国に配流のことは見えるが、親王が王子村に謫居したことは記していない。王子村に謫居してこの地で薨去し、若一王子宮の相殿として、また金峰神社の祭神として祀られたということはすべて口碑によるものであり、花散里の天王古墳も、武市佐市郎は『土佐史談』五一号で「純然たる古墳ではあるが、池田親王とは何等の關係もないことと考えられる」としている。しかし記紀に記載がないとしてその事実を否定することは早計で、口碑もある程度信憑性を認めてもしかるべきものと考えられるわけで、天王古墳の由来伝説は別として、神社奉祀の事実等よりすれば、まず池田親王王子村謫居説は肯定してもよ

いものと思われるのである。⁽¹³⁾

ここで重要なことは、池田親王が徳王子に來られて在住され、ここで薨去されたかどうかという考古学的ならびに歴史学的な事実問題だけではない。筆者の関心はこの地域の住民が池田親王の故事に関する伝説をどのように受け止めて、祭神として尊崇してきたかという心理的事実であり、その精神的伝統がどのように地域民の心の中に浸透しているかという問題である。

この地域の皇室尊重の精神的伝統は土御門上皇（第八三代天皇）の土佐配流の記事の扱いにも現れているように思われる。すなわち、同町史の中世編、第一章鎌倉時代、第二節に「承久の変と土御門上皇」が取り上げられ、その説明がなされている。

「源頼朝が鎌倉に幕府を開き兵馬の権を掌握すると、朝幕間の権力抗争が絶えなかった」「幕府は戦後処分として、事変に関係した後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に配流した。土御門上皇は事変の局外者で後鳥羽上皇の討幕を諫止したほどで、幕府としても処分する考えはなかったが、上皇はひとり都に留まることを心苦しく思われ、摂政九条道家を通じて申入れを行い、結局土佐遷幸が決定した」と。このような理由で土佐に配流された上皇は、現在の香我美町月見山にあった常楽寺を御所として観月されたという。今日、この場所に「土御門上皇仙跡碑」が建てられて、その遺徳を偲んでいる。

この香我美町徳王子の西隣がモラロジー開発の最初の拠点となった野市町であり、東隣が夜須町、北西隣が土佐山田町である。この付近はモラロジー開発の歴史も古く、したがって研究者数も多く、高知県東部支部の支部長や事務所主任、参与、講師などの幹部はこの四つの町から多く出ている。

② 高岳親王（真如法親王）と土佐市周辺

『歴史読本 天皇家系譜総覧』（昭和六一年一〇月、新人物往來社）によれば、第五一代平城天皇の皇子高岳親王については「母ハ伊勢継子、大同四年四月一四日皇太子トナルモ、弘元元年九月一三日薬子ノ変ニ遭イテ皇太子ヲ斃セラレ、後ニ出家シ、入唐ス。元慶五年一〇月一三日在唐ノ僧ヨリノ牒状ニ依ルト、親王ハ西域ニ赴キ、羅越国ニ於イテ薨ズルト云ウ」と記されている。⁽¹⁴⁾ ここにも出家とあるように、高岳親王は弘法大師に帰依して出家し、法名を「真如法親王」といった。親王は空海と同じように長安に経典をもらいに行く決心をされ、貞観七年（八六五年）に南海道に向かい、その途中で現在の土佐市高岡町と伊野町大内に約二年間滞留して修行されたようだ。

山本大著『高知県の歴史』には「土佐の大内村にきたと伝えられている。のち羅越国で虎の害にあったので、遺徳をしたった人々が追悼供養のために五輪塔をたてたという」と書かれているが、この記事には補足説明が必要である。

まず、大内に来たという伝説は間違いないようだが、最初に來られたのは現在の土佐市高岡町であって、京間の「イチヨウ様」付近に上陸され、八幡を通り灘にある廃寺寸前の衰退した清滝寺に入り、そこで仏教の修行をされたようである。ほぼ二年間に、まず村里に京都から分霊した神社を建て、松尾八幡宮として祭られ、その神官にお供の池田琢雲を指名された。その後、池田氏の後裔が代々神官を務め、現当主で三四代目である。神社の案内板には、つぎのように記されている。

当社は約一千百有余年の昔、人皇第五一代平城天皇の第三皇子高岳親王が創建されたと伝えられている。

高岳親王は幼くして皇太子に即位され、次の天皇が約束されていた尊貴の人であられた。然し大同年間（八



写真2 史蹟高岳親王塔

○九年）薬子の乱が起り、親王は追われる身となった。やがて仏門に入り、人心の救済と求道一筋の道を歩む。貞観七年（八六五年）五月南海道に向い海路をもって仁淀川の川口に至り、更にさかのぼり、高岡の地に上陸の第一歩をしるしたと伝う。（三代実録）

清滝寺に逗留修業すること暫し、感ずるところあり京都の産土神石清水八幡宮をこの八幡の聖地に勧請鎮齋したという。この社が松尾八幡宮である。杜領八町八反を賜り古来高東近郷の総鎮守なり。池田琢雲をして神主にあたらしめたという。

高岳親王自身は仏教徒として清滝寺で修行に専念され、地域住民の人心の救済に努められたようだ。この寺は真言宗四国八八カ所の中でも参拝客の多い寺として栄えている。

清滝寺の現在の住職の説明によると、高岳親王は滞在中に裏山に登り、山越えて現在の伊野町大内に行かれたことがあるという。そこには修行のための鍾乳洞があり、また山頂から見ると伊野が京都の地によく似ているためでもあったようだ。山頂から見ると八田の山は東山に、仁淀川は加茂川に似ていると言われて京都を懐かしまれたという。大内の名も京都の土地にちなんで命名されたようで、その他、伊野には八坂神社を中心に北山、北内などの地名、宇治川という川があり、京都を連想させる。なお、高岡にも京間、米野というような地名、加茂川など、京都を偲ばせる名前が残っている。

また、大内には「蘇鶴温泉」という冷泉があり、いまだに一軒だけ営業している。この冷泉は弘法大師が発見されたと伝えられるので、そこで鶴が傷めた羽根を癒していたところから、親王がこの名をつけたという。つまり、それは鶴が蘇生する温泉という意味である。この温泉地は高岳親王の修行場所であった鍾乳洞（戦後の開発で破壊された）から一目瞭然の場所にあることから、この伝説が発生したものと思われる。

土地の歴史家西村某氏が書き、温泉宿に掲げている「蘇鶴温泉の由来」には、つぎのように書かれている。

今より一千年の昔、弘法大師が大内奈路の峰に高野寺の建立を計画した時温泉が発見された。人皇第五一代平城天皇の第三皇子高岳親王が仏教研修を志し、弘法大師の後をしたが、都より大内に遷居せられた当時、現在大内鍾乳洞のある大奈路ヶ峰に屢々登られ、仁淀川を隔てて遙かに八田山を眺め遠く京都の空を偲ばれて仁淀の清流は加茂川の水の如く清く美しく、又八田山は東山によく似ているといわれたそうである。

或る日親王は矢傷をうけた一羽の白鶴が山麗にある泉にとび来り水浴する様子をごらんになり、不思議に思われていた。この白鶴は毎日毎日この泉で水浴していたが、

数日後傷は完全に治癒して何処となくとび去った。親王はこの泉は薬泉であることを知られ、泉の名を蘇鶴温泉と命名したと云い伝えられている。

此の温泉は諸病、特に神経痛、リュウマチ、婦人病、皮膚病一切に特効があるとされている。飲すれば胃腸の薬にもなるといわれる。

ところで、高岳親王が高岡を離れて長安に向かわれたのは六〇歳頃である。親王は決死の覚悟で出発されたようだ。とても無事に帰還できるとは思っていなかったようである。清滝寺の境内の南端に自らの墳墓（「親王の塚」と呼ばれ、現在高知県史跡に指定されている）を作られ、長安の方向に向いた五輪の塔（「逆修の塔」と呼ばれる）を建て、「もしも途中で倒れるようなことがあれば、わが靈魂はここに返ってきて、皆の安寧を守らん」と言い残して出発されたといわれている。

この高岳親王に同行して土佐にきた池田、田原、大平の三氏は松尾八幡宮を中心とする地域に定住しているが、この三氏の子孫が土佐市のモラロジー研究者の中に多いのは興味深いことである。

③ 一宮尊良親王と大方町近辺

第九六代後醍醐天皇の第一皇子として生まれた尊良親王に関する記事は、大平記巻四・一七・一八、増鏡、南路志、大日本史、神皇正統記、長曾我部地檢帳幡多郡下の一、土佐州郡志（幡多）、大方町史などに見られる。ここでは現代の大方町民が尊良親王をどのように捉えているかが問題なのであるから、『大方町史』（昭和三五年）を主要文献にし、¹⁸さらに郷土史家で大方町立歴史資料館「ふるさとの家」の事務長でもある小橋従道氏の教示をも参考にして、土佐における尊良親王の様子をまとめると、およそ次のようになる。

尊良親王は一二三二六年に元服して中務卿となり、やがて皇太子になるであろうと期待されていたが、時の執権北条高時は自分に都合のよい第九四代後二条天皇の皇子邦良親王を皇太子にしたのである。これによって尊良親王やその側近の人々は落胆した。

これより先、後醍醐天皇は執権北条氏の専横無道の行状を憤り、かつまた朝威の衰えたことをいたく嘆かれて、はやくから北条氏を滅ぼして朝廷の権威を回復したいとの考えをもっていた。そこで計画を立てられたが六波羅の知るところとなり、後醍醐天皇は一二三三年八月二四日に三種の神器を奉じて宮中をひそかに逃れ、笠置に行幸された。尊良親王も天皇の後を追って行かれた。

この頃、河内の国赤坂では楠正成が聖旨を奉じて兵を挙げたが、関東の武士は笠置を陥れたのである。親王は赤坂に入り正成と力を合わせていたが、天皇も親王もやがて捕らえられる身となった。動乱と大義名分の地を払った世の一二三三二年に、早くも北条高時は「承久の故事」にならって後醍醐天皇を隠岐の島に遷幸と定め、尊良親王は土佐に遷下と決まった。

やがて長い船路もつがなく、親王は三月下旬に現在の大方町上川口の王無浜に着かれた。その時に、入野郷奥湊川の領主大平弾正は率先して親王をこの浜辺にお迎えしたのである。

土佐の海身は浮草の流れ来て

寄辺なき身を哀れともしれ

これが出迎えた弾正に与えられた親王の短歌で、親王の喜びの気持ちが見えられている。

この大平は入野郷では音に聞こえた豪族であり、しかも勤皇の赤誠に固く、四圍の危険を顧みない決死の武士であった。ところが、中村方面には口湊川に北条氏一族の米津山城があり、また北条方の刺客がいたので、注意

深く山越えして大平の館に案内したのである。当時、中村の一条公は大方の入野の松原付近にまで勢力を伸ばしていたが、親王を出迎えなかったようである。

もう一人、尊良親王一行を出迎えようとした人物がいる。それは近郷の有井川村主有井三郎左衛門豊高である。豊高も勤皇の志の厚い人で、この時早速一族を引き連れて駆けつけたが、親王はすでに大平の館に向かわれた後であった。豊高が遅かったことを悔やんだことから、その後、この浜を「王すでに無し」の意味から「王無浜」と言われるようになったという。現在、高知県史跡として碑が建っている。やがて有井庄司の豊高も大平の館に駆けつけ、赤誠を込めて忠誠を誓ったので、親王は大層喜ばれたという。

これら二人の忠臣に庇護されたとはいえ、尊良親王の身は決して安全なものではなかった。北条方の刺客三人が近辺を徘徊しているという噂があり、二人は警護に神経をとがらせていた。天下の情勢はますます官軍に不利となり、親王の身に万一ということを考えて二人は宮に昼なお暗い深山幽谷の王野山へ移っていた。最終的には有井庄米原の里に移動していただいたようである。親王の食事は粗末なものであったが、親王も一汁一菜で満足されたという。

谷かげに積もる木の葉のそれならで

我が身朽ちぬとなげく頃かな

春霞かすむ浪路はへだつとも

便り知らせよ八重の高潮

このような不自由な親王をお慰めするために、典侍の君（姫）を京に出迎えに行ったが、途中で海賊と荒海に襲われ姫を波間に見失ったという悲しい伝説も残されている。

草深い米原の里の小高い丘に大方町史跡「尊良親王御宮跡」という碑が建っていて、碑文はつぎのように書かれている。

大方町史跡米原行在所跡

一、所在地 大方町大字□川字米原

二、形態 行在所跡（約一〇〇平方米）

三、時代 南北朝

四、指定 昭和四七年大方町史跡

元弘二年三月、時の執権北条高時の専横により後醍醐天皇の第一皇子尊良親王は土佐の国に配流されることとなり、道中佐々木判官時信に警固され為□中将らを随え、八重の潮路も悉なく同年三月下旬、お船は遠流の地畑の庄にお着きになった。

程なく北条方のきびしい監視の中を率先して「戻る浜（王無の浜）」に宮をお迎えした奥湊川領主大平弾正は己が館で有井庄司と共に赤誠をこめて警護していたが、天下の情勢は日々官軍に不利となり、北条方の重圧監視鋭く若宮に万一の危害の及ぶのを憂え、宮を奉じて仏が森の中腹の行在所にお遷したのである。しかしここは海岸より十余軒昼なお暗い深山幽谷であった。

こうした不自由なご日常は余りにも畏れ多く大平・有井の二忠臣は、三度目の行在所を有井庄米原の里にお遷したのである。

聞きなるる契りもつらし衣うつ

民のふせやに軒をならべて

なお、草深い米原には今でも一〇家はかりの家があるが、それらの家々は親王の行在所があるときと同じ数の家だという。この家々の人々は自分達の祖先が尊良親王をお守りしたという誇りをもって、今でも昔のままの草深い地に生きているという。

このような史跡を大切に保存する大方町には、最近モラロジを聞く人々が出はじめている。また、有井庄司の子孫だという家系図を保存している人々が土佐市に在住している。それは松田家一族であるが、その一族にもモラロジの研究者がいるのは偶然のことではなさそうである。

大方町教育委員会（昭和三十七年度文化財保存事業）

北条氏が滅亡して、尊良親王がめでたく都に帰られる際に、親王は忠臣有井庄司を伴って帰りたいと望まれたが、庄司は老齢のためにお断わりしたようだ。ただ、庄司は息子を宮に同行させてお見送りし、名残りを惜しまれたという口碑が土佐市の松田家（有井庄司の子孫の一つ）に残っている。

やがて庄司が病死されたことを知った親王はいたく悲しまれ、供養の五輪石を都から庄司の墓に手向けられたと言われている。大方町大字有井川字長尾前にある「高知県史跡有井庄司の墓」には、確かにその五輪石が現存する。そして碑文には、最初、尊良親王が土佐に配流されたとき庄司がどのように宮にお仕えたかが、前記の米原の碑文とほぼ同じように述べられ、その後につきの文言が記されている。

：親王もめでたく都へ御帰還するに当り、有井庄司を伴って帰ることを切に望まれたが、庄司は老齢の故でお断りしたので、やむなく宮は大平彈正の息子大膳のみを伴なわれ帰還されたという。

やがて庄司病死の計が宮のお耳に達すると、宮はいたくお悲しみになり、御心こめた供養の塔を八反帆の官船に満載して庄司の墓に手向られたという。

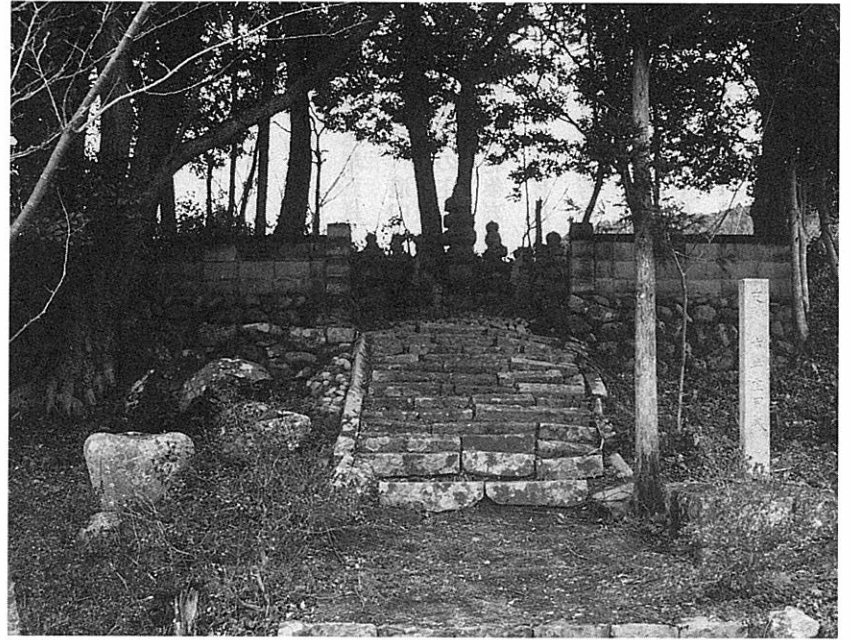


写真3 有井庄司の墓と五輪の塔

我が庵は土佐の山風さゆる夜に

軒洩る月も影こぼるなり

（新葉和歌集）

と山家のお住居を嘆かれ、又都の繁華を慕われる若宮であった。

やがて弟宮護良親王の令旨を奉じた官軍各処に決起し、北条氏も遂に滅亡、王政古に復し、若宮もめでたくご帰還されたが、建武二年（一三三五年）一〇月足利尊氏の反逆によって再び戦乱となり、親王は越前金が崎城に出陣、延元二年（一三三七年）三月六日城兵と共に討死されたのであった。

尊良親王は、又の名を歌の宮様と呼ばれ数々の御歌を詠まれており、特に土佐国での御歌は新葉和歌集などに多く残されている。

大方町教育委員会（昭和三十七年度文化財保存事業）

④ 安徳天皇と高吾北地域

高吾北の越知には、安徳天皇の行在所あんさいしよがあつたという根強い伝説がある。第八代安徳天皇は先帝高倉天皇を父とし、建礼門院徳子（中宮、平清盛の娘）を母として治承二年（一一七八）十一月二日に誕生し、言仁親王といつた。同年一二月に皇太子となり、同四年（一一八〇）天皇に即位した。平清盛は外祖父として幼帝後見の名のもとに政権をほしいままにしたので、国内に平氏打倒の声が高まり、ついに後白河法皇は源氏に平家追討の院宣を下した。安徳天皇は在位四年の後、源氏一門に追われた最後の戦局、壇ノ浦に破れた平家一門と運命を共に

こと、またモラロジの創始者広池千九郎博士が昭和一二二年二月一七日にここを訪問し、中二階にある後醍醐天皇の秘密の隠れ部屋で長い間お祈りをした後に「法学博士広池千九郎 南朝御事蹟探究之為本日吉野カラ此地ニ来ル、御遺蹟を拝シテ感慨無量也、内外多事之今日国民須ラク甚深之注意ヲ払ヒ大義名分ヲ昭ニスベキ也」と記帳されていることなどが、この調査で明らかになった。

さらに驚いたことに、筆者の二日間にわたる御醍醐天皇の事蹟調査に同行していただき、終始懇切丁寧なお世話をいただいた和田保信氏（元御所市長）が吉野行宮となつた吉水院（現在、吉水神社）の代々の住職・宮司をされていた和田家の直系の子孫であることが古文書を読んで分かつたことである。この調査では、まさに最高の人に案内役を引き受けてもらつていたことになる。¹⁹

パスツール（Pasteur, L.）は「偶然は用意の出来ていない人を助けない」と言っているようだが、その意味するものが以上のような奇縁をも含んでいるとするならば、まさに至言であると言わなければならない。この調査では、しばしばこのような奇縁に助けられて思わぬ収穫を上げることが出来たのである。²⁰



写真4 賀名生皇居蹟

また、今回の調査に協力してくれた入野の松原の中にある加茂神社の宮司浦田彦四郎氏は米原にある米原神社の宮司も兼務している。以前は米原神社にも宮司がいて、その格は加茂神社よりも上位にあつたという。この浦田宮司の子息がモラロジ教育を採り入れている明德義塾中等学校の教諭であることも奇縁であろう。

さらに、後醍醐天皇の事蹟調査でも偶然の出会いがあつた。後醍醐天皇は足利尊氏との権力争いに敗れ、京都を逃れて延元元年に吉野へ行幸されたが、一時西吉野村賀名生あなうに隠棲された。この時、土地の郷土堀孫太郎信僧がわが屋形をばらい清めて後醍醐天皇をお迎えしたので、この屋形が仮の行宮あんぐうとなつたのである。（『奈良・飛鳥の史話五〇選 三二六』参照）

この屋形を明治維新の動乱の際に天誅組総裁の吉村寅太郎（土佐勤王党、東津野村郷士）が門に「皇居」という額を掲げて戦火から守つた

にして、平清盛の妻二位尼(時子)に抱かれて西海に入水し、寿永四年(一一八五)三月二四日に八歳の身で崩御したと、日本正史では伝えられている。

だが、平家は瀬戸内海を主戦場とする戦いで天皇を安全なところに逃がすことが出来ず、ただ後退してむざむざと壇ノ浦で幼帝を入水させたのであろうか。これは誰でも抱く疑問である。したがって、反面で天皇は壇ノ浦で救われ、あるいは途中で逃れて四国・中国・九州のいずれかに落ち延びたという説も根強く残っているのである。

四国では、屋島の合戦の最中に身代わりを立てて、天皇は四国に上陸したという伝承が残っている。四国山脈沿いの平家部落には安徳天皇の行在所だったという伝説が残っており、それらは阿波の山城谷や東祖谷山、土佐の上生村西熊山、在所、本川、稲村山、越裏門、椿山、国王山、別府山、高瀬、別枝都などである。これらの潜幸地をさまよわれた揚句に、最後に越知の横倉山に落ち着かれて、そこで崩御されたという伝説があり、現在横倉山の山頂付近は宮内庁によって「安徳天皇御陵参考地」に指定されている。

安徳天皇が横倉山に落ち着かれたという伝説について、高知大学の山本大教授は「土佐でも：土佐郡本川村、吾川郡池川町などに、いわゆる平家伝説としていろいろな話が伝え残されている。安徳天皇も壇ノ浦で入水したが、脱出し、阿波の祖谷山から吉野川をさかのぼり、土佐の山間部を潜幸して、苦難のすえに高岡郡越知の横倉山にたどりつき、この地に行在所を営み、ついに亡くなったという説がある。現在、横倉山は安徳天皇御陵参考地となっており、御嶽神社(横倉宮)は安徳天皇を祭神として正治二年(一一二〇)に建てられたと伝えられている。⁽²¹⁾」

また、地元ではどのように受けとめているであろうか。郷土史家の明神健太郎氏は「天皇潜幸のことが事実であったとすれば、それは平氏土佐守護蓮池家綱の遺臣として、土佐唯一の平氏ゆかりの豪族であった別府氏の支配地であったということ」、また「潜幸のことがあったとすれば誰よりも、まず先に迎えたのは別府氏であったはず⁽²²⁾」と述べている。

さらに『越知町史』(昭和五九年)では、歴史編の第五章で「安徳天皇横倉山潜幸説」をとりあげ、四一頁にわたり考証している。それによれば、まず「屋島の合戦に生き残った平氏の一門残党に守られ、難を逃れて四国に上陸苦難の経路をたどってこの横倉山に落ち着き、ここを最後の地として崩じたという説は、宮内庁にも認められて、現在、天皇家参考地として指定されている」と述べ、「吾妻鏡」には、安徳帝を抱いて入水したといわれる按察局が生存していたと伝えていることをとりあげ、「これらのことを考えあわすと、安徳帝が戦場を脱して落ち延びられたということも、あながち架空の伝説として見過ごすことはできない」とし、「このとき難を逃れて四国路に上陸した平氏一門が、天皇を奉じて困難苦行をつづけ、四国尾根をたどって潜幸の果て、ここ越知町横倉山に最後の行宮を営まれて、若きご生涯を終えられたという説は、古くからわが越知町に伝えられて、町史の中に秘められた深いなぞを残すのである。」⁽²³⁾としている。

謎を残す理由は、平家の落人と安徳天皇潜幸の伝説・伝承が高吾北の村々や部落、山野のいたる所に残っているにも拘わらず、これを明確にする史実的物証がないからである。だが、「それなのに、この地方に逃れてきた落人たちが、土佐の豪族たちが、何者か強力なものの存在を護り、仕えた気配がするのは何故だろう」と問いかけ、あくまで安徳天皇潜幸地としての信仰?を捨てていない。そして、「越知町の西なる方、突兀として聳える横倉山は、古来郷民の深厚な尊崇の念と限りない信仰が捧げられて来た。それは：そこには安徳帝蒙塵の哀史が秘められており、皇室尊崇の国民的畏敬の念の発露であろう。ここに明治以来の主なる郷民の敬慕心のあらわれを誌し

ておく」⁽²⁴⁾と結んでいる。

安徳天皇がこの地に潜幸されて崩御されたかどうかという歴史的確証はともかくとして、この最後のところはこの地域の住民の考え方がいみじくも述べられている。この地に安徳天皇への信仰と強い皇室尊重の念があるのは確かであって、筆者の祖母と父が越知の東隣の黒岩村平野と二ツ野の出身である関係で、寝物語によく横倉山の安徳天皇の話聞かされて育った記憶がある。

横倉山に登ってみると、この山は三方が急峻で西方に尾根が続く天然の要害をなしている。行在所があったといわれる場所は眺望のきく素晴らしいところであり、追っ手を逃れるのにも都合がよい場所に思える。しかも、この行在所を取り囲むように、またそこを仰ぐかのように池川や吾北^{ごほく}の平家部落が見下ろせるのである。

この越知町にはまだモラロジの事務所はないが、近隣の平家部落のある池川町や黒岩には古くから研究者がいるし、南隣の佐川町には事務所が出来ている。

ところで「高吾北」という名称は高岡郡の北部と吾川郡の北部を統括した地域を指しているが、その中心地はなんとといっても佐川町である。この佐川は南学精神に徹した佐川勤王党の志士たちを輩出したところであって、もともと尊皇思想の強い土地柄である。明治維新には宮内大臣の田中光顕伯爵や明治天皇の侍従片岡源馬(利和)男爵を生み出した。今日でも尊皇思想の伝統は続いており、モラロジの研究もこの付近に多く、事務所も出ている。初代主任の片岡光続氏はこの地の中世以来の豪族片岡氏の末裔である。

⑤ 菅原道真・高視親子と潮江、その他

高知市鏡川の南岸、筆山の北麓の景勝地に潮江天満宮がある。この神社は平安朝の名臣として卓越した才幹と

広大無辺の聖徳を兼ね備えた菅原道真を主祭神とするものである。天満宮発行の『潮江天満宮』によれば、その由来縁起はこうである。

道真是学者より身を起して、昌泰二年(八九九)には右大臣に榮進し、左大臣藤原時平と並んで政務をとるようになったが、時平は道真の識見信望共に抜群であることを心よく思わず、密かに排斥の策をたて、やがて道真は延喜元年(九〇一)正月二五日に太宰の権帥^{しんすい}として西海に左遷された。同時に、嫡子右少弁高視朝臣もまた土佐権守(土佐介)として京都を追われ、土佐国潮江に住居した。高見山の麓に邸跡がある。

菅原道真が太宰府で延喜三年(九〇三)二月二五日薨去^{こうきょ}されると、侍臣松本春彦は遺品として袍、剣および観音像を護持してこれを朝臣に伝えるため、はるばると土佐に來国した。しかし老齢と難路に苦しみ健康を害し、延喜五年(九〇五)二月九日七九歳で土佐に没した。俗称「白太夫^{しろたけ}」として広く知られている。

高視は白太夫の没後道真公の遺品を取め、これを靈聖として祭ったのが潮江天満宮の縁起である。高視朝臣は延喜六年に許されて右少弁に復帰し、同一三年三八歳で卒去したとあるが、口碑伝説ではこの地にて逝去されたという。

いずれにしても郷人の天満宮の靈威尊信の念はますます深く、後年になって道真公を中心にして左に高視朝臣、右に北の方を祭り、天穂日命、大海津見命を相殿として、境内には白太夫社等が祭られている。氏子はもと潮江、高知市街の南半、南街^{みなみまち}、下知南半等、旧高知市の約半分を占めていたが、現在では土地の遠近を問わず天満宮信仰は全県下に及び、高知県大社の一つに数えられている。藩政時代には藩主山内家の尊崇篤く、直営で社殿を造営したのである。

この天満宮の氏子のいる地域が高知市におけるモラロジの発祥地(下知)であり、ここには現在事務所が三

つあり研究者も多く、モラロジ―高知講堂も建っている。

菅原道真に關連して、宿毛市小筑紫に「七日島の伝説」というものがある。平安時代の昌泰四年（九〇一）正月、道真が藤原時平の他氏排斥の犠牲となり、右大臣から太宰の権帥に下げられ九州に左遷されるとき、途中暴風雨のために船がこの島に漂着した。この時、菅原道真が「ここも筑紫か」と問われたことから、小筑紫という地名が起こつたと伝えられ、一行はここに七日間繫船した。そのために、この島を七日島と称するようになったというのである。⁽²⁵⁾

今、この島に天満宮があるが、この天満宮の由来は前記の道真公が漂着したことによるものである。また社伝の中の一説に「菅公薨后渡会春彦御遺物ヲ携へ当港へ着船シ自ラ菅公ノ神靈ヲ奉齋地名ヲ小筑紫ト名付ク其後春彦ハ高視卿ヲ奉慕御遺物ヲ奉テ土佐郡へ立越由云々」とあり、これによると道真の死後侍臣渡会春彦が道真公の遺物を高知市潮江の菅原高視（道真の長子で、道真が左遷される時に連座して土佐介に左遷された）の所に送る途中、ここに立寄り、一部の遺品を残してこれを神体として神社を創建したのに始まるというのである。⁽²⁶⁾

宿毛の伝承でも、宿毛市藻津の海岸にある「渡り小島」は、道真の遺臣白太夫（春彦の別名）が九州から土佐へ渡ったとき最初に船を着けた所で、この地名が起こつたと伝えられている。渡会春彦は九州から宿毛付近に上陸したというのである。

この宿毛市にはモラロジ―事務所があり、いま「開発」は小筑紫から大月の方に進みつつある。

⑥ 南学とその影響

南学とは土佐における朱子学のこと、天文年間（一五三二―一五五）に南村梅軒が土佐で朱子学を講じ、⁽²⁷⁾ 忍性・

如淵・天室に伝え、天室は谷時中に、時中は野中兼山・小倉三省・山崎闇齋に伝えた。三省はこれを谷一齋に伝えたものの、闇齋は京都に去り、兼山は弟子を導くに暇なく、あとが絶えたが、谷秦山が新風を起こしたりして土佐には三〇〇年間朱子学が栄えた。これを南学という。この土佐南学は朱子学の単なる解釈学ではなく、義理名分を重んじたもので、かつては土佐藩学を中心であったが、やがて幕末志士の骨肉を養うものとなった。⁽²⁸⁾

この南学の発祥地は春野町弘岡である。この地には早くからモラロジ―が広がり、事務所もある。また、山崎闇齋のいた五台山吸江寺の南から幕末の土佐勤皇党総裁武市半平太（瑞山）が出て、坂本龍馬らの同士に多大の影響を与えた。この付近にはモラロジ―の研究者も多く、いま事務所も開設されている。

四、地域の精神的伝統とモラロジ―の開発——山形県の場合——

前節では、高知県におけるモラロジ―開発史からみて、地域の教育力としての精神的伝統の質量がモラロジ―の受容に關係していることを明らかにしようとした。この結論が他の地域で妥当するかどうかを検証してみる必要がある。

そこで、つぎに東北日本の山形県を選び、この仮説の妥当性を検討することにした。山形県を選定した理由は、序説でも述べたように、血液型においても文化的伝統においても西南日本と異なる特徴をもつといわれる東北日本人の精神的伝統によって検証してみたこと、そして調査を容易にするために、かつて筆者が在住したことがあり、しかも調査に協力してくれる親しい友人がいることによって、この地に白羽の矢をたてたのである。

山形県全域の地域の教育力についてはまだ調査がゆきとどいていない。そこでとりあえずモラロジ―事務所のある地域、すなわち庄内、村山、山形、長井、米沢の五カ所を重点的に選んで調査している。その他にモラロジ

の研究者が比較的多い地域として上山がある。これらの地域の中で調査の進んでいる庄内、山形、上山の三地域をとりあげ、それぞれの地域の教育力としての精神的伝統の内容に触れてみたい。

すでに述べたように、山形県には宗教的風土が根強くあり、信仰心に厚い人が多い。県内各地に由緒ある神社や寺院が多くある。たとえば、出羽三山の羽黒山・月山・湯殿山の各神社、鳥海山の大物忌神社、慈恩寺、山寺立石寺、蔵王連峰の菊田嶺神社、亀岡文珠堂をはじめ、その他の大小さまざまな神社や寺院。⁽²⁸⁾これらの神社や寺院の大祭時には大変なにぎわいをみせる。平時でも参拝者や観光参拝客が多いのには驚かされる。

このような神社や寺院の存在が山形県の宗教的風土の形成に深い係わりをもっている。県民の信仰心はいまだに衰えをみせていない。この信仰心の厚い点については、宗教学の権威玉城康四郎東京大学名誉教授も認めている。⁽²⁹⁾

山形県に多くの神社や寺院が建立された理由について、菅田慶恩と横山昭男の両氏はつぎのように述べている。「むかしの人は山に神が住むと考えた」「大物忌神社は、鳥海山の「山の神」だった。この山が同年（八七一）四月八日、大噴火した」「人びとは不吉な前兆を感じた」「おそろしい蝦夷の反乱などがあるときは、かならず前兆があると信じられていた」。出羽の神々のうち、大物忌神と月山神には朝廷の尊崇が厚かったが、「朝廷は蝦夷地の神々をも手あつく遇することによって、おそらく在地の俘囚らの人心収斂をはかったのだろう」と。⁽³⁰⁾

また、寺院の建立についても「仏教は出羽国などでは、蝦夷教化という目的をもっていた」と述べ、「蝦夷の反乱におびえていた国府では、怨敵降伏・辺境安穩の護法神として、五大明王や四天王がとくに尊信されていたのだろう」という。⁽³¹⁾

宗教にはたしかに政治的な側面も含まれているだろう。わが国には、古来から祭政一致という考え方があったからである。祭りが単に政治の道具だと考えると、上記のような見方も成り立つ。しかし、これはあまりにも政治社会的見地に偏った歴史観ではなからうか。宗教が権力支配の道具だけのものではあれば、その信仰は長続きしないであろう。理由はそれだけではないはずだ。

民衆の信仰を集めるには、そこにはかならず有徳の開祖や後継者がいたはずである。そのような人々を通して神仏に地域住民は五穀豊稔の祈願や病氣治癒の祈願もしたであろうし、肥沃ではあっても雪国のために貧しく、昔は娘を身売りさせなければ生きられなかった土地柄であつてみれば、人間の苦悩・悲哀・罪悪感などからの救済も必要であつたことであろう。このような諸条件と県民の純朴で内向的性格が一体となって、今日の山形県民の宗教性、信仰心の厚さを醸成してきたのではなからうか。

(一) 出羽三山信仰と庄内周辺

日本には伝統的信仰として「山の神」を尊崇する山岳信仰がある。出羽三山信仰はその代表例である。出羽三山とは羽黒山・月山・湯殿山のことであり、これら三山は一体のものとして古来から東北の総鎮守、国家鎮護の靈山として信仰されてきた。月山と湯殿山を奥宮といい、羽黒山に三神合祭殿を設けて本社としている。これを中心に展開したのが有名な羽黒修験である。この地の山岳信仰は最近外国人にまで関心が広がり、出羽三山神社社務所発行の『出羽三山』には英文の案内もあるし、H・B・イアハートのような研究もみられる。⁽³²⁾

ところで、社伝の『出羽三山史』によれば、この三山の開祖は蜂子皇子であるという。⁽³³⁾皇子は第三二代崇峻天皇の第一皇子であつて、日本書紀・崇峻記にも皇統譜にも記載されていて、母は相伴小千手子である。⁽³⁴⁾

崇峻天皇は第二九代欽明天皇を父に、蘇我小姉君を母として誕生している。第三〇代敏達天皇と第三二代用明

山祭礼中最大の行事として参拝客が群衆する。蜂子皇子はこのように人々の病気を治したり一切の災いを除く神秘的な能力をもっていたので、災厄や苦悩を祈願をした。皇子はやがて「悪魔は焼き捨てよ」という神霊に接したので、ただちに田に火を放ち焼き払ったところ、人々を苦しめていた災厄が除かれたので、里人たちは三山の大神の御守護と皇子の仁慈に報いるために、年々秋になると初穂を献上して人民息災、悪魔退散、五穀豊穰、万民快樂の祭りを奉納することになった。これが羽黒の有名な松例祭である。それは二月三日から元旦にかけて行われる一種の虫送り神事であって、羽黒山祭礼中最大の行事として参拝客が群衆する。

その際、奇妙な形をした大鳥が飛んでいて、なんとなく皇子を案内する様子なのでついて行くと、やがて老樹の鬱蒼と茂った霊山に着いたという。そこが羽黒山である。皇子はこの山で修行に励まれ、やがて羽黒山の神霊を感じられるようになり、つづいて月山大神や湯殿山大神の霊徳を感じるようになった。⁽³⁶⁾ そのようなわけで、羽黒の名前は皇子を案内した大鳥の羽根の色にちなんで名づけられたという。⁽³⁶⁾

蜂子皇子がはじめて入国した出羽地方はまだ蝦夷の勢力が強い時であった。だが皇子は進んで羽黒に登り、そこで修行の道を開き、里人らに生業を教え、自らも一心に修道につとめたという。伝説によれば、太古の原始林の果てにある湿原や草地を見た皇子は、これを開拓して美田にする計画を持ち、自らも雑木を倒し草を刈り、はじめて五穀の種子をまいた。やがて稲が黄金色に実り、里人ははじめて五穀を食べることができ、歡喜して皇子に感謝したという。⁽³⁷⁾ 現在では蜂子皇子の命日とされる八月三十一日に羽黒山八朔祭が行われている。これは「田面作り」ともいわれ、二一〇日の厄日も無事であるようにと豊作を祈願する祭事である。

ところが、ある年、この地方に疫病がはやり、里人は病気に苦しみ死者もたくさん出て、耕作田はしだいに荒廃していった。里人たちは三山の大神に祈願したが、皇子もこの里人の苦難災厄を救うために心魂こめて百日の祈願をした。皇子はやがて「悪魔は焼き捨てよ」という神霊に接したので、ただちに田に火を放ち焼き払ったところ、人々を苦しめていた災厄が除かれたので、里人たちは三山の大神の御守護と皇子の仁慈に報いるために、年々秋になると初穂を献上して人民息災、悪魔退散、五穀豊穰、万民快樂の祭りを奉納することになった。これが羽黒の有名な松例祭である。それは二月三日から元旦にかけて行われる一種の虫送り神事であって、羽黒山祭礼中最大の行事として参拝客が群衆する。



写真5 蜂子皇子陵

天皇は異母兄に当り、第三代推古天皇（敏達天皇皇后、最初の女帝）は異母姉である。『天皇家系譜総覧』を見ると、当時の天皇家の婚姻関係は蘇我氏の女子を妃にするならわしがあったようだ。⁽³⁸⁾ 当時は最高権力者の大臣蘇我稲目や馬子が政権をほしいままにしていた時代であって、馬子は妹の堅塩媛と小姉媛を欽明天皇の妃に、石寸名媛を用明天皇の妃にし、父稲目の跡目をついで権謀を弄したので、崇峻天皇はその横暴を嫌い、天皇即位の元年に大伴小皇子を妃とし、蜂子皇子が誕生した。

これが馬子の感情をいたく害して、天皇は即位して間もなく馬子によって暗殺された。蜂子皇子は皇位に登るべき人であったが、蘇我氏の横暴と難をさけて、聖徳太子のすすめで仏門に入り弘海と称した。そして、諸国行脚の旅に出られ、やがて北日本海を経由してはるばる出羽国由良の港に到着したという。

(二) 蔵王連峰信仰と山形市周辺

山形市は県庁所在地であるが、この都市にも出羽三山信仰と同じような山岳信仰が根強く残っている。市民は晴れた日には西方に秀麗な月山や朝日連峰などを仰ぎ、東方に蔵王連峰を仰いで生活をしている。また、市中にも神社や寺院が多くある。

し、奥羽をはじめ関東八カ国にまで広がり、ついには全国を風靡するようになった。

このような伝説をもつ出羽三山の麓に庄内平野が広がっている。庄内は古くから皇室との関係が深い。たとえば、承久の変事には後鳥羽上皇が羽黒の衆徒を身方にして鎌倉幕府の討幕計画をたてたし、後醍醐天皇の時代にはいち早く南朝に組し、出羽官軍の中心になった。後醍醐天皇の第一皇子尊良親王のことはすでに高知県のことろで取り上げたが、その親王の第一皇子守永親王が北畠顕信らに随行されて出羽に入国したのは正平二年のことである。その時には、すでに庄内に北朝の勢力も及んでいたようである。⁽³⁸⁾

明治維新には、この地は徳川幕府に味方していたので、出羽三山の寺院はことごとく取り壊され、現在は神社のみ残っている。

いずれにしても、このように庄内は皇室とゆかりの深い土地柄なのである。また、この地域の女性的な方言や女性の高祖頭巾、あるいは庭園、庭石、紅葉、竹林、茶室、菓子、文芸熱などには、どこことなく京風が受け継がれているといふ。⁽³⁹⁾

このような歴史的・精神的伝統をもつ庄内にいち早くモラロジーの事務所ができてきているのは、偶然のことではなからう。



写真6 湯殿山本宮入口

除くという意味から「能除仙人」とも言われたと伝えられている。

このようにして皇子は、一方では神・仏道の修行に励んで人々を感化・教化し、他方では米作を中心とする産業を興して道を広めること数十年、ついに欽明天皇の一三年一〇月二〇日、九一歳で薨去した。その陵墓は羽黒山神社のすぐ近くにある。皇子はのちに朝廷から照見大菩薩の位が贈られ、陵墓は宮内庁の管理のもとに守部が置かれ、東北における唯一の皇族陵墓となっている。

皇子の薨後は弘俊王子が跡をつぎ、その修行の道を伝えたという。その後、蜂子皇子の偉徳を慕って、加賀白山を開山した泰澄大師や、修験道の祖といわれる役行者、また真言宗の開祖弘法大師、天台宗の開祖伝教大師とその弟子慈覚大師なども修行のために来山したと伝えられている。これがのちに羽黒派修験道として発達

この地の信仰の中心は出羽三山の他に蔵王権現や荇田嶺神社、あるいは山寺立石寺などである。市民の蔵王権現への信仰は山形駅前にある大きな山形交通ビル（通称、山交ビル）の中にある大きな権現像にも見られた。一階正面入り口を入るとすぐにロビーがあり、その中央に滝に打たれる力強い大きな権現像が祭られていた。周囲にはベンチがあり、多くの人々の憩いの場所になっていたが、四、五年前にビルが手狭になったためであろうか、現在はこの権現像も滝もベンチも取り外されている。

蔵王山は全体がご神体であり、登山口には大きな朱塗りの鳥居が立っている。山頂の火口付近には荇田嶺神社があり、そこには修行中の山伏や観光客の参拝があとを断たない。

この神社のすぐ近くに伊達政宗の第七子といわれる村田城主伊達宗高の公德碑が建っている。伊達家七代の行朝は南北朝時代に南朝方として勇名をさせた人であり、したがって伊達家は皇室にゆかりの武家である。⁴⁰また、この地の人間の純朴な心情を今に伝えるこの公德碑は、地域住民の道徳的な教育力を感じさせるものとして注目される。碑文にはつぎのように書かれている。

伊達宗高公命願之跡

政宗公の第七子 柴田刈田三万石村田城主伊達右衛門大夫宗高公 紅顔十八歳の寛永元年 刈田嶽の大噴火に際し領民の惨状見るにしのびずと敢然この嶽に登り 火煙にむせびつつ身の危難を犯して命願をかけました したが その至誠天に通じ 遂に鎮火を見るに至りました。

古来命願後三年以内にその命を天に召されるとされていましたが 同三年京都に於いて従五位下右衛門大尉に任ぜられ 二条城の守護にあたるうち 同八月十七日抱を患らいあたら花の蕾を散らしました 享年わずか二十歳

龍島院殿涼山英清大居士と号し村田町龍島院に帰葬しました 先きに公の遺徳を後世に伝えるため 大正十五年三年祭記念事業として記念碑を建てましたが 風雪のため荒廃したので 今回顕揚碑を建立しその霊を慰め遺徳を偲ぶこととした次第であります この事により平和な豊かな国土が建設されることを祈ってやみません

なお公の顕揚事業に寄せられた諸賢の御芳志に対し 心から尊敬と感謝の意を表します

昭和四十二年八月十七日

伊達宗高公顕揚会会長

村田町長 大平良治撰文

つぎに、山寺の立石寺について少し触れておきたい。山形県の東部の奥羽山脈には天台宗が多く、西部の出羽丘陵には真言宗が多い。⁴¹東部には慈覚大師円仁の開基と伝えられる天台宗の寺院が散見され、山寺の立石寺は円仁を開山者と仰ぎ、開祖は安慧としている。この地の仏教信仰は戦乱に明け暮れる時代には武士の間にも広がり一般庶民は戦国の世と雪国の貧しさとに苦しめられ、その苦悩災厄からの救いを仏教信仰に求めたのである。立石寺の根本中堂のそばに供養のために祭られたおびただしい水子地藏が、この地の女性の悲しみを現している。俳人松尾芭蕉がこの地に足を踏み入れたのはちょうど三百年前の一六八九年であり、あの有名な「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の句を遺している。

最近、山形市にはモラロジーの研究者がふえ、支部と事務所が出来ている。

(三) 上山市における「ふるさと創生」と地域の教育力

山形市の南隣の温泉郷が上山市である。歌人斎藤茂吉の故郷であり、また紫衣事件に連座した沢庵禪師の配流の地として知られている。

この地の信仰の中心は、山形市と同じように古来から蔵王連峰である。上山市の住民は限りない愛着と尊崇の念をもって、この美しい蔵王連峰を仰ぎながら生活をしてきた。最近発行された『上山市立上山城ガイドブック』にも、蔵王は幻想の山として「遠い昔、火を噴く蔵王は神のおわす山として崇められた。やがて山の静けさがとりもどされると、村びとたちは信仰の山として陸続と登拝した」と紹介されている。ここにこの地域の人々の蔵王信仰がいみじくも述べられている。

蔵王信仰とともに、この地域には道徳的教育力が根強いように思われる。この地に足を踏み入れると、先人の遺徳を顕彰しようとする文化財保存運動がみられるからである。上山城の再建、沢庵の旧蹟春雨庵の再建、あるいは斎藤茂吉記念館の設置などにその動きが顕著に出ている。

① 上山城の再建とその意義

まず最初に目を引くのは、かつて東北の名城とうたわれた美しい上山城が元禄五年（一六九二）に徳川幕府によって取り壊されて以来、ちょうど二九〇年目の昭和五七年（一九八二）に地元民の熱意によって再建されたことである。

上山城の由来は、元和八年（一六二二）に最上氏が改易となり、その所領が分割されて上山には松平丹後守重忠が四万石大名として入部して上山藩が誕生したことにはじまる。重忠の祖先は三河国能見村に住んでいたので

能見松平と称した。この重忠は上山の街道の整備や城見町づくりなどに貢献した。

この松平氏の後に蒲生氏がやって来る。その後には土岐頼行が寛永五年（一六二八）に二万五千石の大名として相馬から入部し、上山城を改修させて近世的な城郭を完成し、その美観は東北の名城とうたわれた。しかし、この土岐氏が越前野岡に転封された直後に上山城は幕府の命令で取り壊された。理由は不明である。土岐氏は源頼光の子孫に当り、美濃国土岐郡に住んでから土岐氏を名のっていた。元禄五年（一六九二）まで親子二代六四年にわたって在城し、検地や産業の奨励、街道や町の整備などに多くの治績を残した。

元禄五年、土岐氏の後に金森頼時が飛騨高山から無城の上山に入部した。元禄一五年（一七〇二）には松平信通が三万石大名として備中庭瀬より入部して館を建て、上山城の再建をはじめた。しかし上山の黄金時代といわれる土岐氏の上山城を再建するには至らず、明治維新とともに廃城となった。

現在の「昭和の城」は土岐氏時代の美しい城を再建したものである。この城は上山の歴史、自然科学、産業の資料を展示する郷土博物館の性格をもち、昭和五七年一〇月に再建されたものである。城内に入ると、この城の再建の目的と意義がつぎのように明記されている。

元禄五年から二九〇年という歳月を経て、上山城がよみがえりました。はるかに蔵王連峰をのぞみ、上山市街を一望にする月岡公園に築かれた昭和のこの城には、先人たちの歴史と文化が息づいています。

ふるさとを愛する人びとによって築かれたこの城が、新しい上山のシンボルとして、多くの人びとの心のかたみに刻みこまれていくことを願っています。

ここに上山市民の手になる「ふるさと創生」と地域の教育力の再現を見ることができるのである。

天正元年（一五七三） 一才 但馬国出石に秋庭能登守綱典の子として生る
 同一〇年（一五八二） 一〇才 出家
 慶長五年（一六〇〇） 二八才（省略）
 同一四年（一六〇九） 三七才 後陽成天皇の勅命を奉じ大徳寺に入る
 寛永五年（一六二八） 五六才 ……紫衣事件……

沢庵禅師の略年譜

将軍家光の深い信頼と帰依を受け、随処に自在の力を発揮しました。

上山を去りました。
 沢庵は皇室の信任極めて厚く仏門最高の勅願寺を預った程であり、また柳生但馬守のためには禅の立場から不動智神妙録を書き之を授け、宮本武蔵にも剣禅一如の極意を説き開眼させたとの逸話もあり、晩年には

出した高僧でありました。禅に生きる沢庵は幕府の宗門に対する極度の干渉に堪え兼ねて幕府の権勢に抗弁した。いわゆる紫衣事件により徳川二代将軍秀忠の怒りに触れ寛永六年（一六二九）出羽の上山に謫流たたくされました。

当時の城主土岐山城守頼行は沢庵を迎え厚遇し深く帰依しました。（頼行日頃その徳を敬仰し閑寂を好む禅師のため、この地に草庵を贈りし処、禅師殊のほか欣び、沢庵はこの庵をこよなく愛し「春雨庵」と名付け雅趣風韻に富むこの庵で配流の身を閑寂の中に月日を送りました。）

その間論居千首の歌を詠み茶をたて道を説き、また文化経済勸農或いは築庭と卓抜な才能を以って城主の厚遇に応え大きな業績を遺しました。此処に在ること三年寛永九年七月三代将軍家光により赦免され此の地



写真7 沢庵禅師旧蹟春雨庵

② 沢庵禅師の春雨庵再建とその意義

寛永四年（一六二七）に徳川幕府によって高僧名僧への紫衣着用を許していた朝廷の権限を無効とする紫衣事件がおこった。紫衣とは尊貴を象徴する紫色の法衣をいい、元来は朝廷が高徳の僧に対し着用を許すものであった。ところが、国家の絶対支配をめざす徳川幕府は幕府に許可なく紫衣の勅許を禁じ、ついには一部僧侶への紫衣勅許を無効とした。その後も、これに抗議した沢庵、玉室らを流罪にするなど厳しい態度でのぞんだ。それは朝廷―幕府対立の一面をのぞかせる出来事であったともいえよう。

皇室の信任厚い沢庵はこの紫衣事件のために、寛永六年（一六二九）上山藩預かりの身として配流となり、約三年間上山に在住したのである。その間の事情を沢庵旧跡にある案内板「沢庵禅師と春雨庵」には、つぎのように書かれている。

桃山江戸の初期を通じ禅師沢庵宗彭は傑

- 同 六年（一六二九） 五七才 出羽上山に配流さる
- 同 九年（一六三二） 六〇才 將軍秀忠薨じ沢庵赦免され江戸に召さる
- 同 一五年（一六三八） 六六才 沢庵上洛、後水尾上皇に法話御進講
- 同 一五年 將軍家光沢庵のため品川に一寺建立の旨発表す
- 同 一六年（一六三九） 六七才 品川東海寺落成、沢庵入寺開祖となる
- 正保二年（一六四五） 七三才 二月一日東海寺において寂す⁽⁴³⁾

ここに見るように、上山での沢庵は藩主から特別の歓待を受けたようである。その歓待ぶりは昭和六〇年に上山城で行われた『沢庵宗彰展』の資料にも、つぎのように書かれている。

当時の上山藩主土岐頼行は、流罪の身の沢庵を格別の厚意をもつてなし、上山城外に小庵春雨庵を建てて師父のごとく親い、衣食万般にわたり世話をいたしました。沢庵の郷里への手紙に「山城の守のねんごろさ、家中の侍衆までも殿の祖父などのおもおもしろくあしらひ」と述べているように、まさに流人と思えぬ歓待を受けたと思われます。⁽⁴⁴⁾

また、昭和二八年（一九五三）に沢庵和尚の旧跡に春雨庵が再建されたが、その公德碑によると、沢庵は藩主土岐頼行の求めに応じて禅思想に基づく行政や武道などの面で教えを授け、またこの地の人びとに大きな感銘を残して去っていったようである。

ここにあるように、土岐氏は沢庵の禅思想に基づく行政によって善政を行い、また「劍禅一如」の武道・兵法をいち早く取り入れたようだ。これはのちの徳川幕府の武道にも大きな影響を及ぼすことになる。この土岐氏の治世時代が上山の黄金時代といわれているのである。

沢庵のその他の業績として土木事業がある。当時、藩主の悩みの種は上山城に水が出ないことであつた。この問題を藩主から相談を受けた沢庵は山手から水を導入する土木工事を自ら設計し指導したと伝えられている。上山城にある看板には、つぎのように書かれている。

今は昔寛永年間 時の領主土岐山城守の在任中 この月岡城（上山城）は出羽の名城といわれるほどの豪華なものでしたが 惜しいかな「水」に恵まれず 城主の悩みの種でした。たまたま高僧沢庵禪師が上山に配流されてきましたので 城主は禪師を厚くもてなし 禪師に城内の水不足解消の策を頼みました。博学でしかも政治、経済に精通する禪師は自ら設計に当って大平山から虚空蔵山を巡って松山に通ずる俗称「沢庵堰」を作り この水を城中に引き入れて城主の期待に応えました。（以下、省略）

ここに見るように、高僧沢庵は土木事業にも精通していたようで、その事業は讃岐に満濃池を作った空海（弘法大師）の土木事業にも匹敵するものである。このような実業能力も備えていたからこそ、多くの武将や庶民が沢庵に帰依し、その高徳を仰いだのであろう。

第二次大戦後、上市市の有志が沢庵の遺徳を顕彰するために昭和二七年に品川の東海寺に焼け残った春雨庵の一部を譲り受け、上山の沢庵旧跡に春雨庵を再建したのである。「沢庵禪師遺跡春雨庵復元記念誌」によれば、春雨庵の「記念碑の禪師尊像は：昭和二七年村尾旅館御宿泊の際今上陛下（昭和天皇）の天覧を賜わりしものなり」と銘記されている。尊皇思想の厚かった沢庵の像を昭和天皇はどのような感慨をもつて眺められたであろうか。

また、この春雨庵には茶室が建てられていて、訪問者に沢庵がたしなんだ茶の湯がふるまわれることがある。筆者が平成元年五月二二日に訪問したときには裏千家の茶会が催されていて訪問者が多かった。

ここに見るように、上市市の「地域の教育力」は一貫して地域の精神的・道徳的伝統を保存する形で創生され

ているのである。この地にモラロジエの研究が多いのも偶然のことではなからう。

むすび

この研究はモラロジエの開発に関するわれわれの経験から帰納して仮説をたて、その仮説をいま検証しているところである。それはまだ十分なものとは言えないので、今後十分に検討されるべき問題である。

ただ、この仮説をここに提示した理由は、筆者がこれまで外国人の「開発」をした経験からみても、ある程度妥当な仮説であるように思えたからである。私は昭和四一年（一九六六）からイギリスやポルトガルの知人や友人に広池千九郎博士の英文モラロジエ『*The Characteristics of Morality and Supreme Morality*, 1966を贈り、その内容に対する感想を求めてきたのである。

① 「神の原理」おまひ神観念について

最初に返事をもらったのはスコットランドの友人A・E・ローズ女史 (Anne Elizabeth Rose of Kilravock Castle) からのものである。それにはこう書かれている。

Dear Mr. Hosokawa,

Many thanks for sending me the two books which arrived

I believe that the God of the universe has given to people of all nations a consciousness of good and evil which can be expressed in morality. God also gave a book of His Word for guidance and to show His Plan for all nations. My father's family lived by this book and my mother's family also as they

were descended from French Huguenots who left France when persecuted for their faith in 1699. This book has a wonderful message, and in case you have not come across it, I am sending you a copy in the hope that our universal God will bless you too in the reading of it.

Wishing you joy, I remain,

Your sincerely,

Elizabeth Rose of Kilravock

これによると、彼女はモラロジエの神観念に関する明確な感想は述べていない。そのかわりに、自分の精神的伝統であるキリスト教の『聖書』を読むことをすすめている。ただ、彼女はモラロジエの神観念に東洋的なもの、すなわち汎神論的な神の捕らえ方を感じとっていたようだ。

この東洋的な神観念とキリスト教的な神観念の違いという点に関して、作家の遠藤周作は『聖書のなかの女性たち』（講談社、昭和四七年）や『キリストの誕生』（新潮社、昭和五七年）などの中で、常に問題にしているのである。つまり遠藤は後者の著作の中で「ポーロの海外布教」を取り上げて、つぎのように述べている。

ユダヤ教をこえるためにユダヤ教の外で布教しようとしたポーロは、キリスト教が受け入れられるためには、ユダヤ教の地盤がまだやはり必要だと思ひ知らされた・・。一神論を一神論の地盤のない風土に持ちこむ困難さを最初に体験したのは・・ポーロだった。東ヨルダンの汎神論的な世界はキリスト教という一神論を持ちこんだポーロを拒絶した。⁽⁴⁶⁾

キリスト教徒である遠藤周作は、キリスト教がなぜ日本に十分に根をおろさないかを常に問題にしながら、つぎつぎと作品を生み出している。遠藤はいまキリスト教の布教に苦心した頃のポーロの心境にあり、それが作品

の中に投射されているのである。この問題はモラロジーの国際化を考える際に重要な問題となるであろう。

② 「伝統の原理」について

その他に、外国人の「開発」で問題になりやすい原理は「伝統の原理」である。「伝統の原理」について最初に問題を投げかけた外国人は、元モラロジー研究所顧問のJ・A・ラワリーズ (Joseph A. Lauwerys) 博士であった。特に「国家伝統」について国家主義的な匂いを感じとった博士は、民主主義の立場から執拗にこの点を突いてきた。その討論内容はモラロジー研究所研究部研究委員会編『ラワリーズ先生の講演及び研究会記録(一九七七年)』(一九七八年三月)として記録されているので、ここで再説はしない。ただ、結論は「モラロジーの国家伝統観はイギリス人には簡単には理解されないだろう」ということであった。

だが、それはすべてのイギリス人に該当するということではない。前記のローズ女史はスコットランドの氏族体制の中で育ち、しかもローズ氏族の第二五代首長の立場にある人であるから、「伝統の原理」には抵抗感をもたなかったようだし、大法官府主任主事のR・E・ホール氏のような人はわざわざ著書を出版して「伝統の原理」を高く評価しているのである。⁽⁴⁶⁾

また、イギリスの紋章院 (College of Arms) の前ガーター勳局長 (Garter Principal King of Arms) のA・R・ワグナー (Anthony R. Wagner) 博士もホール論文を積極的に評価することによって「伝統の原理」を支持している。一九八二年四月一五日付の筆者への手紙の中で、つぎのように述べている。

I have been reading with much interest Mr. Robert Ball's thesis on the 'ortholion principle' of morality, of which you have very kindly sent me a copy. Many of the things he says appeal to me as

most persuasive, especially, perhaps, those relating to the relevance of ancestry and family to social order, on which I believe the views I have long held have much in common with those of morality.

I see that Mr. Ball and I are members of the same club, the Athenaeum, and if we should happen to meet there we might have some interesting talk.

With kind regards,

Your sincerely,

Anthony Wagner

Clarenceux King of Arms ⁽⁴⁷⁾

人間は自己の置かれた立場や状況から価値判断する傾向があるから、「伝統の原理」をめぐって賛否両論があるのは当然のことである。

③ 日本人と「伝統の原理」

最近、筆者はヨーロッパ人の「開発」の難しさもさることながら、日本人の開発の難しさも感じはじめている。その最大の課題が「伝統尊重の原理」というわけである。世代はますます若返りつつあり、戦後教育の影響がしだいに地域の教育力の主流になっているところもある。

そこで以上のような仮説をたてて、その検証を行ってきたのである。その結論が正しければ、地域の教育力の動向と地域の精神的伝統をよく心得たモラロジーの開発を推進しなければ、思わぬ困難にぶつかり、無駄骨を折ってしまうかもしれない。今後、モラロジーの立場から各地における「地域の教育力」の内実を確認していかな

ければならないであろう。

注

- (1) この発言は「当世徳目事情第三部、新しい道徳とは、インタビュー四」、『河北新報』河北新報社、昭和五九年五月二二日報道記事の取材のために、釜滝記者が五月九日にモラロジー研究所を訪ね、研究部長室で面談したときに語られたものである。
- (2) 菅田慶恩・横山昭男著『山形県の歴史』、昭和四五年、山川出版社、六頁。
- (3) 江戸初期の上山城主は能見松平、蒲生に続いて土岐である。松平は街道の整備や城見町づくりに業績を残し、土岐は沢庵に行政の指導を受けて検地や諸産業の奨励、街道や町の整備に尽力した。
- (4) 沢庵禪師のいた旧庵「春雨庵」は上山市長清水字松山にある。そこには「流滴の沢庵禪師」という公德碑が建てられ、この地における沢庵の業績が称えられている。
- (5) 蜂子皇子の出羽三山開山と稲作については、出羽三山神社著『出羽三山史』、昭和二九年、六一年、五九頁参照。なお、出羽三山神社社務所編纂発行『出羽三山』の略年表によれば、「能除上人(蜂子皇子) 羽黒山を開く。
- (6) (異説あり)とも書かれている。異説については菅田・横山の前掲書を参照せよ。
- (7) この資料は高知新聞社刊『四国年鑑一九七二』、昭和四五年一〇月二〇日発行の資料(四七八頁)と、高知新聞に報道された選挙報道の記事・資料からまとめたものである。すなわち、①昭和五一年一月一日、②昭和五一年一月二六日、③昭和五四年一〇月九日、④昭和五五年六月二四日、⑤昭和五八年一月二〇日、⑥昭和六一年七月七日。
- (8) この資料は高知新聞の昭和五八年一月一六日の記事からまとめたものである。
- (9) 第三表と第四表の数値は、注(7)の高知新聞に報道された得票数を二次加工したものである。
- (10) 平川恵一編『至誠無息 追憶石元鉄造先生』、昭和六三年、追憶編集委員会、三六一頁参照。
- (11) 高知県編『高知県史要全』、大正一三年、昭和四八年

復刻に記載された記事は、徳王寺在任の恩師村上徳美高知大学名誉教授(元高知大学教育学部長)がわざわざ筆写して送ってくださったものである。

- (12) 同右
- (13) 香我美町史編纂委員会編『香我美町史 上巻』、昭和六〇年四月、一一〇―一一三頁。
- (14) 同、一四五―一四六頁。
- (15) 牧野洋編集『天皇家系譜総覧』、昭和六一年一〇月、新人物往来社、一八五頁。
- (16) 山本大著『高知県の歴史』、昭和四四年、山川出版社、三二頁。
- (17) 清滝寺の現任職に面談したのは昭和六二年三月一三日で、同行者は石元貢氏と葛岡栄夫氏である。
- (18) 大方町史編纂委員会編『大方町史』、昭和三五年、四〇―八五頁を参考にした。
- (19) 昭和一年の二・二六事件で広池博士と親交のあった鈴木貴太郎侍従長などが青年将校に襲撃されたが、その当時の第一師団長堀丈夫中将が吉野神宮宮司の家に生まれていて、再び天皇の命運にかかわる事件に巻き込まれていたのである。堀丈夫中将のことについては、秦郁彦『軍ファシズム運動史』、昭和三七年、原書房、一六七頁、四二四頁参照。
- (20) 後醍醐天皇の事蹟調査は昭和六一年七月三〇―三二日に行ったが、和田保信氏の他に芳村利定氏と細川家茂氏(御所モラロジー事務所主任)にも同行してもらった。
- (21) 山本大、前掲書、四七―四八頁。
- (22) 明神健太郎編著『佐川郷史(高吾北の歩み)』、昭和四七年、高知印刷、六二―六三頁。
- (23) 越知町史編纂委員会編『越知町史』、昭和五九年、第一法規、一二九―一三〇頁。
- (24) 同右、一六三頁。
- (25) 宿毛市史編纂委員会編『宿毛市史』、昭和五二年、宿毛市教育委員会、九八頁。
- (26) 菅原道真が太宰府に左遷された年は、「潮江天満宮」の説明書では「延喜元年」となっているが、『宿毛市史』では「昌泰四年」となっている。
- (27) 同右、九九頁。なお、社伝の一節に「渡会春彦」の文字が見えるが、「潮江天満宮」の説明書には「松本春彦」となっている。俗名「白大夫」は共通している。
- (28) 小学館編集『大日本百科事典ジャポニカ』第一三巻、昭和四五年、小学館、七〇七頁。
- (29) 角川日本地名大辞典編集委員会編『角川日本地名大辞典 六 山形県』、昭和五六年、角川書店、一七六、二二二―二二二、三三六、六二七―六二八頁。

- (29) 玉城康四郎著『東西思想の根底にあるもの』、昭和五八年、講談社の「まえがき」で本書の企画が「山形県の山中にこもった時である」と述べられているが、同教授がモラロジー研究所に来所され、山形県の山中にこもられた理由をお尋ねしたときに、この話がでた。
- (30) 誉田・横山、前掲書、四一頁。
- (31) 同右、四三頁。
- (32) H. B. Earhart, *A Religious Study of the Mount Haguro Sect Shingendo*, 1970, Sophia University
- (33) 出羽三山神社『出羽三山史』、前掲、六頁。なお、出羽三山神社社務所編『出羽三山』の年表によれば、「五八八、崇峻元、能除上人(峰子皇子)羽黒山を開く。(異説あり)」と記され、前掲『山形県の歴史』には「社会では崇峻天皇の皇子能除太子が羽黒を開山し…たといっているが、もとより信じがたい」(一六〇頁)とある。
- (34) 牧野洋編、前掲書、一七一―一七二頁参照。なお、崇峻天皇の御陵は倉梯岡陵(くらはしのおかのみねのみやま)と記されているが、最近話題を集めている「藤ノ木古墳」が実は崇峻天皇陵かもしれないと、法隆寺の高田良信執事長は推理している。東京新聞、平成元年一月二七日の十六面を見よ。
- (35) 同右、一六七―一七二頁。
- (36) 前掲『出羽三山』、七頁参照。
- (37) 同右、八頁。
- (38) 同右、五六―五七頁、六六―七三頁参照。
- (39) 大川広海『出羽三山の四季』、新人物往来社、昭和五九年、一三一―一三三頁の「京風と羽黒山」を参照せよ。
- (40) 誉田・横山、前掲書、七五頁。
- (41) 同右、四五頁。
- (42) 上山城管理公社編『上市市立上山城ガイドブック』、昭和五八年、四頁。
- (43) この本文は上市市文化財調査委員萩生田氏撰文のものであるが、(一)内の文章は同じ旧跡に建つ「沢庵禅師遺跡春雨庵復元記念誌」から補足したものである。
- (44) 上山城管理公社編『沢庵宗彰展』、昭和六〇年、二頁。
- (45) 遠藤周作著『キリストの誕生』、昭和五七年、新潮社、一三四頁。
- (46) Robert E. Ball, *The Crown, The Sages and Supreme Morality*, 1983, Routledge & Kegan Paul の著作の中心課題は「伝統の原理」の意義であり、その展開である。
- (47) A・ワグナー卿の現在の地位は、Clarenceux King of Arms(まだ、日本語の訳語を決めていない)である。紋章院においてはGarter King of Armsとともに重要な地位である。筆者がこの紋章院を訪問した一九七八年一
- 一月九日には、ワグナー卿のオフィスは適切な後任者が見つからないためか、以前のGarter Principal King of Armsの使用していた。なお、現在の職位Clarenceux King of Armsの由来については、Anthony Richard Wagner, *Heralds of England*, 1967, Her Majesty's Stationary Office, pp.177-182 に詳しくある。
- また、森護『英国紋章物語』、一九八五年、三省堂、六八―六九頁に簡単な説明がある。